

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2023年2月22日
【事業年度】	第73期（自 2021年12月1日 至 2022年11月30日）
【会社名】	北興化学工業株式会社
【英訳名】	HOKKO CHEMICAL INDUSTRY CO.,LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 佐野 健一
【本店の所在の場所】	東京都中央区日本橋本町一丁目5番4号
【電話番号】	03(3279)5151(代表)
【事務連絡者氏名】	経理部長 綿井 聡
【最寄りの連絡場所】	東京都中央区日本橋本町一丁目5番4号
【電話番号】	03(3279)5152(経理部)
【事務連絡者氏名】	経理部長 綿井 聡
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第69期	第70期	第71期	第72期	第73期
決算年月	2018年11月	2019年11月	2020年11月	2021年11月	2022年11月
売上高 (百万円)	41,015	41,986	39,641	40,287	44,864
経常利益 (百万円)	4,081	3,751	3,258	3,843	5,905
親会社株主に帰属する 当期純利益 (百万円)	2,944	2,818	2,400	2,927	4,214
包括利益 (百万円)	2,604	2,624	4,508	4,345	4,566
純資産額 (百万円)	24,179	26,356	30,363	34,220	38,240
総資産額 (百万円)	40,421	43,398	48,201	51,987	57,566
1株当たり純資産額 (円)	892.77	973.17	1,121.13	1,263.58	1,412.06
1株当たり 当期純利益金額 (円)	108.69	104.07	88.61	108.06	155.60
潜在株式調整後1株 当たり当期純利益金額 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	59.8	60.7	63.0	65.8	66.4
自己資本利益率 (%)	12.8	11.2	8.5	9.1	11.6
株価収益率 (倍)	5.1	5.7	12.7	7.8	5.8
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	3,360	3,923	4,590	2,940	3,869
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	2,142	2,235	1,885	1,689	2,809
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	1,391	2,017	361	965	691
現金及び現金同等物の 期末残高 (百万円)	1,259	904	3,956	4,321	4,814
従業員数 [外、平均臨時 雇用者数] (人)	739 [147]	768 [147]	763 [138]	772 [131]	760 [123]

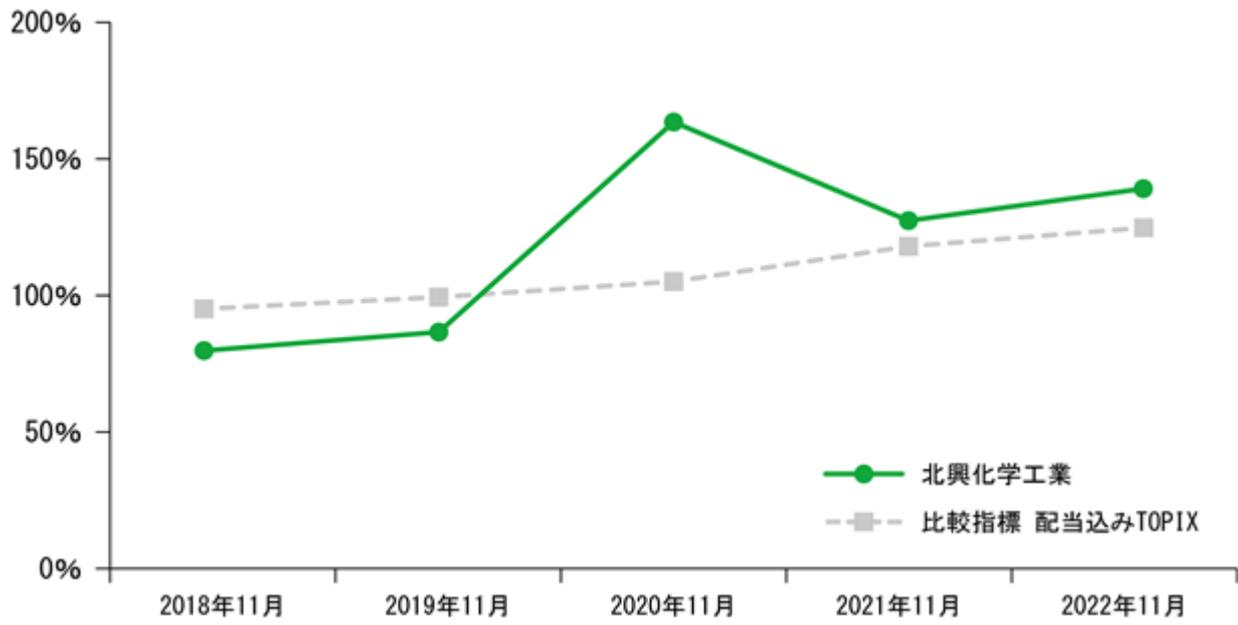
- (注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額は、潜在株式が存在しないため、記載しておりません。
2. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日)等を第70期の期首から適用しており、第69期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。
3. 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を第73期の期首から適用しており、第73期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を適用した後の指標等となっております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第69期	第70期	第71期	第72期	第73期
決算年月	2018年11月	2019年11月	2020年11月	2021年11月	2022年11月
売上高 (百万円)	39,780	39,469	36,890	36,893	40,485
経常利益 (百万円)	3,875	3,543	2,903	3,206	4,163
当期純利益 (百万円)	2,818	2,634	2,044	2,452	2,923
資本金 (百万円)	3,214	3,214	3,214	3,214	3,214
発行済株式総数 (千株)	29,985	29,985	29,985	29,985	29,985
純資産額 (百万円)	23,322	25,243	28,940	32,138	34,739
総資産額 (百万円)	40,069	42,752	47,211	50,210	53,750
1株当たり純資産額 (円)	861.14	932.08	1,068.60	1,186.70	1,282.76
1株当たり配当額 (うち1株当たり 中間配当額) (円)	15.00 (6.00)	17.00 (7.50)	18.00 (9.00)	19.00 (9.00)	21.00 (10.00)
1株当たり 当期純利益金額 (円)	104.06	97.24	75.49	90.54	107.94
潜在株式調整後1株 当たり当期純利益金額 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	58.2	59.0	61.3	64.0	64.6
自己資本利益率 (%)	12.7	10.8	7.5	8.0	8.7
株価収益率 (倍)	5.4	6.1	14.9	9.3	8.4
配当性向 (%)	14.4	17.5	23.8	21.0	19.5
従業員数 [外、平均臨時 雇用者数] (人)	628 [140]	635 [141]	636 [132]	647 [125]	636 [117]
株主総利回り (%) (比較指標：配当込み TOPIX) (%)	79.8 (95.1)	86.6 (99.4)	163.5 (105.1)	127.4 (118.0)	139.1 (124.8)
最高株価 (円)	848	644	1,183	1,358	1,256
最低株価 (円)	502	379	431	846	730

- (注) 1. 第70期の1株当たり配当額には、創立70周年記念配当2円を含んでおります。
2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額は、潜在株式が存在しないため、記載しておりません。
3. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日)等を第70期の期首から適用しており、第69期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。
4. 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を第73期の期首から適用しており、第73期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を適用した後の指標等となっております。
5. 東京証券取引所の市場区分見直しに伴い、最高株価及び最低株価は、2022年4月3日以前は東京証券取引所市場第一部におけるものであり、2022年4月4日以降は東京証券取引所スタンダード市場におけるものであります。

6. 株主総利回りおよび比較指標の最近5年間の推移は次のとおりです。



2【沿革】

当社は、1950年2月27日野村鉱業株式会社製薬部より分離独立し、北興化学株式会社の商号をもって資本金500万円、農薬の製造販売を目的として設立されました。

当社は、設立当初より「種子から収穫まで護るホクコー農薬」をモットーに、安全で優れた製品を提供する農薬事業を営んでおります。また、有機触媒、電子材料原料、医農薬中間体などを提供するファインケミカル事業を経営のもう一方の柱として積極的に推進し、この分野でも国内外で高い評価を受けております。

事業内容の主な変遷は次のとおりであります。

- 1950年2月 北興化学株式会社を設立。本社を東京都千代田区に設置。
北海道常呂郡留辺蘂町に留辺蘂工場を設置し、農薬の生産・販売を開始。
- 1950年12月 本社を北海道札幌市（現 札幌市中央区）に移転。
- 1953年11月 商号を北興化学工業株式会社（現商号）に変更。
- 1953年12月 本社を東京都千代田区に移転、岡山県児島郡胸上村（現 玉野市胸上）に岡山工場を設置。
- 1954年11月 神奈川県鎌倉市に中央研究所を設置。
- 1961年3月 新潟県新発田市に新潟工場を設置。
- 1961年10月 東京証券取引所市場第二部上場。
- 1963年4月 ホクコーバーダル株式会社を設立。
- 1964年11月 岡山工場に有機リン合成工場（現 合成第3工場）を建設。
- 1964年12月 秋田市に秋田工場を設置。（1972年操業休止）
- 1966年11月 中央研究所（現 開発研究所）を神奈川県鎌倉市から同県厚木市に移転。
- 1967年11月 ホクコーバーダル株式会社を双商株式会社に改組。
- 1967年12月 美瑛白土工業株式会社（現 連結子会社）を設立。
- 1968年6月 富山県中新川郡立山町に富山工場を設置。（1972年操業休止）
- 1968年10月 ブラジル北興化学農畜産有限会社を設立。（1976年経営権を譲渡）
- 1969年1月 本社を東京都中央区に移転。
- 1970年1月 北海道滝川市に北海道工場を設置、常呂郡留辺蘂町から移転。
- 1970年2月 岡山工場に塩化ビニール安定剤原料合成工場（現 合成第2工場）を建設。
- 1972年1月 ファインケミカル部を設置。（現ファインケミカル事業グループ）
- 1976年12月 双商株式会社の商号を北興産業株式会社（現 連結子会社）と改称。
- 1977年3月 岡山工場に医薬品製造工場（現 合成第4工場）を建設。
- 1982年3月 静岡県榛原郡相良町（現 牧之原市白井）に静岡試験農場を開設。
- 1982年7月 岡山工場に多目的合成工場（現 合成第5工場）を建設。
- 1985年9月 北海道夕張郡長沼町に北海道試験農場を開設。
- 1985年11月 富山工場敷地内に富山試験農場を開設。（2007年閉鎖）
- 1987年5月 東京証券取引所市場第一部上場。
- 1987年12月 岡山工場に多目的合成工場（現 合成第6工場）を建設。
- 1989年7月 開発研究所敷地内に化成品研究所を設置。
- 1991年8月 ホクコーパックス株式会社（現 連結子会社）を設立。
- 1991年11月 岡山工場に多目的合成工場（現 合成第7工場）を建設。
- 1995年1月 新潟工場に除草剤専用の液剤第2工場を建設。
- 1995年12月 ISO 9002を全工場（北海道、新潟、岡山）で取得完了。
- 1999年3月 ISO 14001を新潟工場で取得。
- 2000年1月 ISO 14001を北海道・岡山工場で取得し、全工場で取得完了。

- 2001年 1月 岡山工場のISO 9002をISO 9001へ移行
- 2002年 1月 新潟工場のISO 9002をISO 9001へ移行
- 2002年 8月 中国江蘇省に張家港北興化工有限公司（現 連結子会社）を設立。
- 2003年 2月 北海道工場のISO 9002をISO 9001へ移行
- 2004年10月 張家港北興化工有限公司に合成工場（現第 1 工場）を建設。
- 2006年 4月 OHSAS 18001を全工場（北海道、新潟、岡山）で取得完了。
- 2007年12月 ISO 9001およびISO 14001を張家港北興化工有限公司で取得。
- 2009年10月 張家港北興化工有限公司に新工場（第 2 工場）を建設。
- 2009年12月 岡山工場にクリーンルームを備えた多目的合成工場（合成第 8 工場）を建設。
- 2012年 7月 開発研究所に中間実験棟を建設。
- 2015年 1月 本社事務所を東京都中央区日本橋本町に移転。（ 8 月に本店移転登記を実施）
- 2016年 5月 米国ノースカロライナ州にHOKKO CHEMICAL AMERICA CORPORATION（現 非連結子会社）を設立。（ 2017年 3 月に活動を開始）
- 2016年11月 新潟県北蒲原郡聖籠町に新潟工場第二工場を建設。
- 2019年 1月 ベトナムに試験農場を開設。
- 2019年 3月 村田長株式会社の全株式を取得し、子会社化。
- 2019年11月 岡山工場に多目的合成工場（合成第 9 工場）を建設。
- 2020年 4月 岡山工場のOHSAS 18001をISO 45001へ移行。
- 2020年 9月 北海道工場のOHSAS 18001をISO 45001へ移行。
- 2021年 2月 新潟工場のOHSAS 18001をISO 45001へ移行。
- 2022年 4月 東京証券取引所の市場区分の見直しにより、市場第一部からスタンダード市場へ移行。
- 2022年10月 北海道工場に除草粒剤工場を建設。

3【事業の内容】

当社グループは、当社、連結子会社5社（北興産業(株)、美瑛白土工業(株)、ホクコーパツクス(株)、村田長(株)、張家港北興化工有限公司）および非連結子会社1社（HOKKO CHEMICAL AMERICA CORPORATION）により構成されており、農薬ならびにファインケミカル製品の製造・販売を主たる事業として行っています。

当社グループの事業における位置付けおよびセグメントとの関連は、次のとおりです。

（1）農薬事業

農薬につきましては、当社が製造していますが、当社で使用する農薬原料の一部は、連結子会社美瑛白土工業(株)が製造しています。

製品の販売につきましては、当社が主として行っていますが、一部の農薬は、連結子会社北興産業(株)が販売しており、連結子会社美瑛白土工業(株)は、バルーンおよび銅基剤等を販売していません。

非連結子会社 HOKKO CHEMICAL AMERICA CORPORATION（米国ノースカロライナ州）は、北中南米における農薬市場の調査および当社が販売する農薬製品の普及活動を行っています。

（2）ファインケミカル事業

電子材料原料等のファインケミカル製品につきましては、当社が主として製造していますが、製造の一部は、連結子会社張家港北興化工有限公司（中国江蘇省）が行っています。

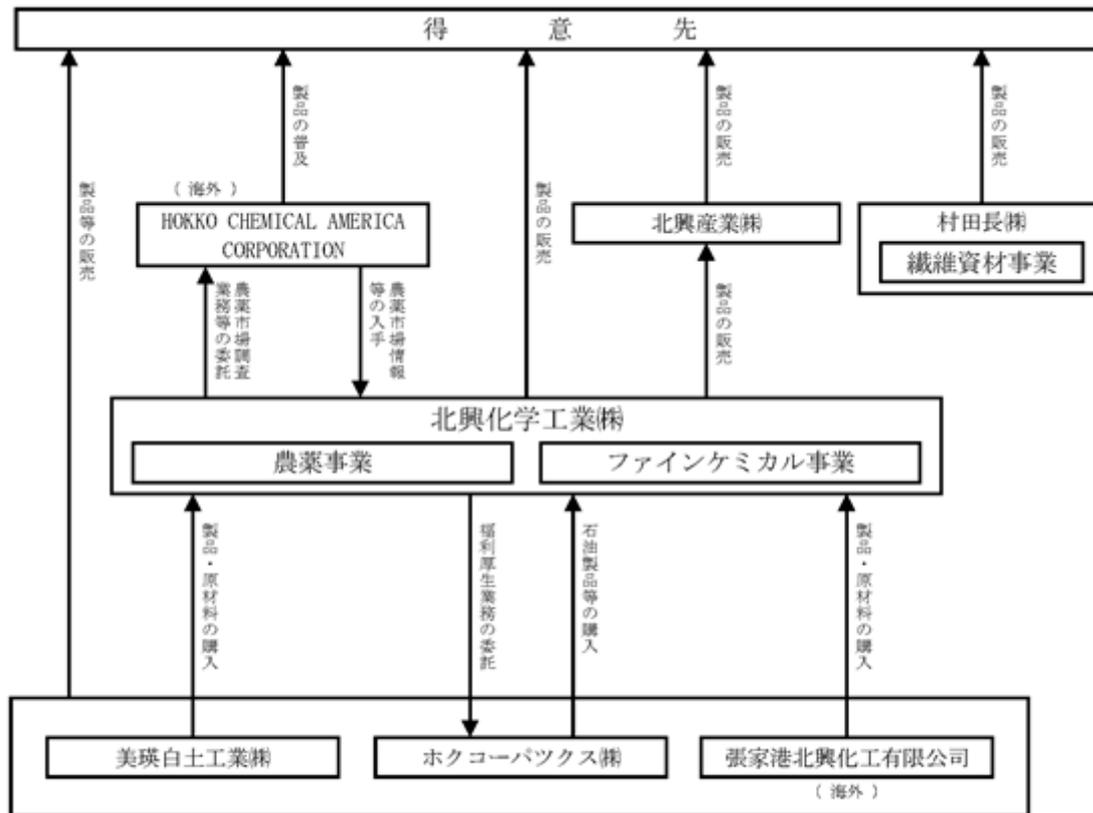
製品の販売につきましては、当社が主として行っていますが、連結子会社北興産業(株)が一部を国内で販売しており、また、連結子会社張家港北興化工有限公司が一部を中国国内等に販売しています。

（3）繊維資材事業

繊維資材の販売につきましては、村田長(株)が行っています。

(事業系統図)

以上に述べた事項を系統図によって示すと次のとおりです。



- ※1. 北興産業株、美瑛白土工業株、ホクコーパックス株、村田長株、張家港北興化工有限公司は連結子会社です。
- ※2. HOKKO CHEMICAL AMERICA CORPORATION は非連結子会社です。

4【関係会社の状況】

連結子会社

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容
張家港北興化工 有限公司 (注)1	中国 江蘇省	1,000	ファインケミカル製品の製造・販売	100	役員の兼任あり 営業上の取引 当社が販売するファインケミカル 製品の製造・販売 資金援助あり
村田長(株)	大阪府 大阪市	100	繊維資材の販売	100	役員の兼任あり 資金援助あり
北興産業(株)	東京都 中央区	30	ファインケミカル製品等の販売	100	営業上の取引 当社製品の販売
美瑛白土工業(株)	東京都 中央区	10	銅基剤およびバルーン(白土発泡球体)等 の製造・販売	100	営業上の取引 当社の使用する農薬原料等の製造・ 販売
ホクコーバックス(株) (注)3	東京都 中央区	10	石油製品等の販売	100 (40)	営業上の取引 当社の使用する石油製品等の販売等 資金援助あり

(注)1. 張家港北興化工有限公司は特定子会社に該当しております。

2. 有価証券届出書または有価証券報告書を提出している子会社はありません。

3. 議決権の所有割合の()内は、間接所有割合(内数)で子会社北興産業(株)が所有しております。

5【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2022年11月30日現在

セグメントの名称	従業員数(人)
農薬事業	419 (80)
ファインケミカル事業	297 (38)
繊維資材事業	15 (-)
その他	4 (4)
全社	760 (123)
合計	760 (123)

(注) 1. 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数は()内に年間の平均人員を外数で記載しております。

2. 全社として記載しております従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門に所属しているものであります。

(2) 提出会社の状況

2022年11月30日現在

従業員数(人)	平均年令(才)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
636 (117)	44.1	18.9	6,671,864

セグメントの名称	従業員数(人)
農薬事業	411 (78)
ファインケミカル事業	202 (38)
全社	636 (117)
合計	636 (117)

(注) 1. 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数は()内に年間の平均人員を外数で記載しております。

2. 平均年間給与は、賞与および基準外賃金を含む税込額であります。

3. 全社として記載しております従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門に所属しているものであります。

(3) 労働組合の状況

イ. 当社の労働組合は、北興化学労働組合と称し、本部を本社に置き、2022年11月30日現在組合員数は479名であり、日本化学エネルギー産業労働組合連合会に加盟しております。

ロ. 労働条件その他諸問題については、労使協議会において相互の意思疎通を図り円滑な関係を保っております。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 会社の経営の基本方針

当社グループは、「社会貢献」「環境」「技術」を経営のキーワードとし、全ての人々の幸せのため、食糧の安定供給に寄与する安全で安心な農薬製品および産業活動を幅広く支えるファインケミカル製品を社会に提供していくことを企業理念としています。

この企業理念のもと、立案した事業計画を着実に実行することにより、持続的かつ安定的な成長を実現し、国内外の産業の発展と豊かな社会づくりに貢献します。また、取締役会を中心とした経営の自己規律のもと、企業価値の向上を図るとともに、社会に信頼される企業であり続けます。

(2) 経営計画

当社グループは、2021年度を初年度とする経営計画「HOKKO Value Up Plan 2030」（2021/11期～2030/11期）を策定しました。最初の5年間を1st Stage for Creation（2021/11期～2025/11期）とし、業務改革の推進により基盤強化を図り、次の5年間の2nd Stage for Advanceで、あるべき姿に到達することを目指してまいります。

また、当社グループの持続的な成長とサステナブルな社会の実現への寄与のため、SDGsの達成に取り組みます。

〔長期経営計画〕

長期業績目標

売上高	500+	億円
経常利益	50+	億円

スローガン

未来は創造できる ～強く、豊かなHOKKO～

〔中期経営計画 「HOKKO Value Up Plan 2030 1st Stage for Creation」〕

基本方針

企業価値向上と社会課題の解決に向け、ムリ、ムダ、ムラを排除し、筋肉質で骨太な企業体質を造り上げ、強く、豊かなHOKKOを実現します。

そのために、『収益構造改革』、『造り方改革』、『働き方改革』の三つの改革を柱とし、それぞれにKPIを設定し、進捗を管理します。

『収益構造改革』においては、「成長・財務基盤」を実現することで、安定的な売上高と収益額を確保していきます。

『造り方改革』においては、「高効率化・省力化・環境対策」を強化し、高品質・高付加価値な製品を市場に提供していきます。

『働き方改革』においては、「業務効率化・人材育成」に重視して取り組み、全ての従業員が個性と能力を十分に発揮できる環境を整備していきます。

経営目標

次の経営指標を2025年度までに達成すること、または計画期間中維持することを目標といたします。

業績目標	目標値
売上高	465億円
経常利益	44億円

KPI			目標値
収益構造改革	収益性	売上高経常利益率	9%以上
		ROE	8%以上
	財務健全性	自己資本比率	60%以上を維持
造り方改革	農薬事業	製造原価 (2020年度実績物量基準)	2021～2025年 累計8億円削減
	ファインケミカル事業	製造能力 (2020年度実績出来高基準)	2025年度に20%向上
働き方改革	売上高販管費比率 (委託研究費を除く)		17%以下

〔SDGsへの取り組み〕

取り組み方針	Social KPI	2025年度	2030年度	SDGs
全ての人々が幸福である社会の実現に貢献する。	健康経営優良法人の認定取得(経済産業省の顕彰制度)	2025年度までに取得	維持	 8.8
製品の開発から廃棄に至る全ライフサイクルにわたり環境負荷を最小限に抑える。	エネルギー原単位(2020年度比)	5%以上削減	10%以上削減	 7.3
農薬製品の提供を通じて、持続可能な農業を支援する。	高拡散性粒剤の水稻作付面積割合	5%以上	10%以上	 2.4 8.2
ファインケミカル製品の提供を通じて、産業の技術革新に貢献する。	新製品の上市数	2025年度までに累計60製品以上	2030年度までに累計130製品以上	 8.2 9.5
繊維資材の提供を通じて、産業の発展と豊かな社会づくりに貢献する。	リサイクル繊維の使用率	10%以上	30%以上	 12.5

SDGsの達成に向けた当社グループの取り組みを、総合的かつ効果的に推進するため、「SDGs委員会()」を設置し、取り組みへの提言と進捗管理、評価を実施しております。

2022年12月1日付にて、サステナビリティに関する取り組みのより一層の強化、推進を目的に「SDGs委員会」を発展的に解消し、「サステナビリティ委員会」を新設しております。

(3) 事業環境

〔農薬事業〕

国内販売におきましては、国内農薬市場が横ばいで推移する中で販売競争の激化が進んでいくものと予想され、園芸分野での販売拡大を目指すとともに、農薬市場の拡大傾向が続く海外販売におきまして、農薬登録取得国の拡大と合わせて、販売拡大を目指してまいります。

〔ファインケミカル事業〕

品質と価格の両面において顧客の要望が高度化する医薬・農薬分野や、自動車のエレクトロニクス化や新たな情報通信技術の進展等により拡大が見込まれる電子材料分野における開発競争、価格競争の激化、化学品に対する世界的な規制の強化が進んでおります。こうした中で、生産能力の増強や新技術の研究開発に努め、主要3分野（樹脂、電子材料、医薬農薬）の販売拡大を目指してまいります。

〔繊維資材事業〕

新規顧客、環境対応型繊維素材等の新商品開発による販路拡大を目指すとともに、当社グループ企業との営業面および内部体制面でのシナジー効果発揮にも注力してまいります。

(4) 対処すべき課題

〔農薬事業〕

農業の明日を見据えた製品開発とラインナップの強化

- ・省力化志向に対し、新たに投入した高拡散性粒剤の普及拡大に努めてまいります。
- ・新規園芸剤の普及により、園芸剤シェアの向上を目指してまいります。

付加価値の高い製品の拡大

- ・スマート農業（防除AI、ドローン散布等）に対応する新規製剤を開発し、その普及拡大に努めてまいります。
- ・環境負荷低減のため、少量・高濃度・低投薬量散布に対応する製剤技術を確立し、その製品化を実現してまいります。

環境変化に対応できる人材育成

- ・進化する農業技術を習得し、実務に活用してまいります。
- ・専門知識の向上に努め、その共有化を図ってまいります。
- ・海外展開を支える人材を育成してまいります。

海外市場への取り組み強化

- ・東南アジアへ普及拠点を拡大してまいります。
- ・イプフェンカルバゾンの登録国を拡大し、その普及推進に努めてまいります。

グローバル化に対応した新規原体の創製

- ・海外におけるマーケットや農薬規制に関する情報を収集してまいります。
- ・研究開発活動の効率化を進め、海外市場への展開を目指した新規原体の創製に注力してまいります。

設備の充実による原価低減

- ・新除草粒剤工場（2022年12月1日本格稼働）の安定稼働に努めてまいります。
- ・新規製剤の製造技術を習得し、その向上に努めてまいります。

「みどりの食料システム戦略」への対応

- ・政府が策定した持続可能な食料システムの実現を目指す「みどりの食料システム戦略」への対応を進めてまいります。

〔ファインケミカル事業〕

付加価値の高い製品の拡大

- ・提案型受託業務を強化してまいります。
- ・カップリング反応における触媒配位子（リガンド）を充実してまいります。
- ・電子材料分野での製品成長期に合わせて、計画的な増産体制を構築してまいります。
- ・高機能設備を導入し、顧客ニーズへ対応してまいります。
- ・高度な分析機器を導入し、製品の品質を高めてまいります。

設備の充実による原価低減

- ・合成第9工場の自動化設備のノウハウを他工場へ展開してまいります。
- ・岡山工場のスマート化を推進してまいります。
- ・新工場の建設やスクラップ&ビルドにより、製造設備を効果的に配置してまいります。

コア技術の深化と独自新製品の開発

- ・グリニャール反応工程の能力と品質の向上を目指してまいります。
- ・さまざまな金属種を利用した反応を開拓してまいります。
- ・自社製品（リン化合物）を活かした新しいコア技術を開発してまいります。

海外市場への取り組み強化

- ・ホスフィン触媒配位子の需要を発掘し、シェア拡大に努めてまいります。
- ・海外展示会、学会等を利用し、製品と技術をPRしてまいります。
- ・海外営業拠点を充実してまいります。
- ・海外展開を支える人材を育成してまいります。

アライアンス等による新規ビジネスの創出

- ・生産、販売の効率化を目的とした他社との業務提携を目指してまいります。
- ・アライアンス等も視野に入れた新規分野でのビジネス拡大に注力してまいります。

カーボンニュートラルへの取り組み

- ・カーボンニュートラルに向けて、より一層の省エネルギーの推進、使用燃料の低炭素化（燃料転換）に努めてまいります。

〔繊維資材事業〕

調達・供給構造の再構築

- ・中国市場に日本製高付加価値製品を供給してまいります。
- ・輸入品の比率を増やし、売上・利益率の向上に努めてまいります。
- ・新規委託生産拠点の構築に注力してまいります。
- ・新規販売先を開拓してまいります。

製品開発力・収益力の強化

- ・環境に配慮した商品を開発し、販売を強化してまいります。
- ・介護・防災関連商品を開発し、販売を強化してまいります。
- ・企業向け完成製品の受注販売に注力してまいります。
- ・新基幹システムの稼働に伴う、在庫管理の強化による収益力の向上に努めてまいります。

各事業グループとのシナジー効果の拡大

- ・農業従事者向けブランドの開発に努めてまいります。
- ・繊維資材の専門知識を活かし、作業着、防保護具を供給することで収益の拡大に努めてまいります。
- ・繊維資材のサプライチェーンに防カビ剤の使用を提案してまいります。

2【事業等のリスク】

当社グループの経営成績、株価および財務状況等に影響を及ぼす主要なリスクには以下のようなものがあります。ただし、これらは当社グループに関するすべてのリスクを網羅したものではありません。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末において当社グループが判断したものであります。

1．農薬製品販売に対する諸条件の影響

当社グループは、農薬事業とファインケミカル事業を収益確保の主な柱として事業展開していますが、農薬製品の販売は、農業政策の変化、市場動向、天候、病害虫の発生状況等によって影響を受けます。特に、予期せぬ急激で大きな変動が生じた場合には、当社グループの事業が大きな影響を受ける可能性があります。

2．急速な技術革新による影響

ファインケミカル製品の市場は、新規企業の市場参入や、廉価製品あるいは新規商品の台頭などにより、価格競争にさらされております。当社グループでは、得意とするグリニャール反応を活用し、顧客のニーズに合わせた付加価値の高い製品を市場に提供しておりますが、想定外の技術革新や急激な市場変化に適切に対応できなかった場合には、当社グループの事業が影響を受ける可能性があります。

3．原材料の調達による影響

当社グループで製造している製品の原材料等の調達（購入価格を含む）は、国内外の状況、並びに原油、ナフサ価格などの動向等の影響を受けます。

これに対し、当社グループは、調達ルートの多様化、販売価格の改定などを推進しておりますが、購入先における法規制の強化や、故障・事故・サプライチェーンの混乱等の支障が生じた場合には、当社グループの事業が影響を受ける可能性があります。

4．為替レートの変動による影響

当社グループは、中国に設立した子会社でファインケミカル製品の一部を生産しており、連結決算における財務諸表項目の円換算額は為替相場に左右されますので、大きな為替相場の変動が生じた場合、当社グループの事業が影響を受ける可能性があります。また、当社グループと海外との取引は、主として外貨建てで行っております。為替予約や外貨建ての債権債務による一部ヘッジを行っておりますが、大きな為替相場の変動が生じた場合は、当社グループの事業が影響を受ける可能性があります。

5．中国現地法人の影響

当社グループの中国現地法人は、中国国内での法規制の変更や社会情勢の変化などに影響を受けます。これに対し当社グループは、積極的な情報収集に努め、中国の政策に合致した対応や環境負荷低減のための設備投資等を行っておりますが、予想の範囲を超える大きな法改正や経済・社会情勢の変化があった場合は、当社グループの事業が影響を受ける可能性があります。

6．新製品の開発による影響

新製品の開発には、多大な人的・経済的資源と長期にわたる時間を必要とします。開発期間中の市場環境の変化、技術の進歩等により、新製品の開発可否判断、開発後の収益計画が影響を受ける可能性があります。これに対し当社グループは、研究・検査体制の充実による開発のスピードアップ、定期的な市場動向の調査、収益試算の検証等により対応しておりますが、新製品の開発が著しく遅延した場合、または困難となった場合には、競争力が低下し、当社グループの事業が影響を受ける可能性があります。

7．予期せぬ事故等の発生による影響

当社グループは、厳格な原材料の受入検査、製品の品質管理、定期的な設備の整備点検等を実施し、国際基準に基づく品質マネジメントシステム(ISO9001)、環境マネジメントシステム(ISO14001)、労働安全衛生マネジメントシステム(ISO45001)により操業、運営しておりますが、事故、自然災害等のトラブルで操業停止、生産供給不足、品質異常、製品の保管条件の悪化などの不測の事態が発生する可能性があります。また、事故等による工場および工場周辺の物的・人的被害を完全に回避することはできません。製造物にかかる賠償責任については保険(P.L保険)に加入しておりますが、すべてをカバーすることは困難であります。

当社グループは、法令および諸規則に適合した製品を製造・販売しておりますが、品質問題や副次的に発生する環境問題、社会問題等を起こした場合には、当社グループの事業が影響を受ける可能性があります。

また、想定される災害毎に事業継続計画(BCP)を作成し、速やかな事業復旧のための訓練を行っておりますが、想定外の災害が発生した場合には、当社グループの事業が影響を受ける可能性があります。

8．法規制等への対応による影響

当社グループは、日本国内における農薬取締法、製造物責任法、化審法(化学物質の審査及び製造等の規制に関する法律)、P.R.T.R(化学物質排出移動量届出制度)、環境に関する諸法規等の法規制、また、事業展開中の諸外国におけるさまざまな法規制等のもとで事業活動を行っております。当社グループは、北興化学工業グループ行動規範、コンプライアンス基本方針を定め、法令遵守の姿勢を明確にし、社会に信頼される企業として行動しております。また常に関係法令の動向を確認し、最新の法規制を理解して事業活動を行っておりますが、法規制の大幅な改正によりその遵守のために多額の費用が発生した場合や事業活動が制限された場合には、当社グループの事業が影響を受ける可能性があります。

9．新型コロナウイルス感染症による影響

当社グループは、新型コロナウイルス感染防止のため、国や自治体の指針に則り適時、在宅勤務テレワークや時差出勤、Web会議の促進、アクリル板による勤務スペースの隔離、国内外の出張制限、工場・研究所への受け入れ見学制限等を実施しておりますが、同感染症の蔓延状況によっては、原材料の調達などの生産活動への支障や経済全体の低迷に伴う需要の減少により、当社グループの事業が影響を受ける可能性があります。

10. 知的財産権の侵害による影響

当社グループは、製品開発や製造の過程において、多くの技術やノウハウを蓄積しております。それらの保護のため、積極的な知的財産権の取得に取り組んでおりますが、海外においては、知的財産権の保護が不十分な国があり、当社グループの知的財産権が第三者により侵害される可能性があります。

また、当社グループでは他社の知的財産権を侵害しないように開発・製造を進めておりますが、他社から知的財産権の侵害を訴えられ、差し止めや多額の損害賠償により、当社グループの事業が影響を受ける可能性があります。

11. 情報漏洩による影響

当社グループは、事業活動を通じて取引先の個人情報や当社グループの営業機密等、多くの情報資産を保有しております。それらの情報管理については、全役職員に対する情報セキュリティ教育の実施、サイバー攻撃に対応するソフトやメール誤送信防止システムの導入等の対策を講じておりますが、高度化するサイバー攻撃や不測の事情による情報漏洩により、当社グループの事業が影響を受ける可能性があります。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループ（当社及び連結子会社）の財政状態、経営成績およびキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」という。）の状況の概要は次の通りであります。

経営成績の状況

当連結会計年度における我が国経済は、新型コロナウイルス感染症に対する行動制限の緩和等により、緩やかに持ち直してきました。

景気の先行きについては、ウィズコロナの下で、各種政策の効果や海外経済の改善もあって、持ち直していくことが期待されます。しかしながら、ウクライナ情勢の長期化や急激な為替変動の影響が懸念され、世界的な金融引き締め等が続く中、海外景気の下振れが我が国の景気を下押しするリスクとなっており、物価上昇、供給面での制約、金融資本市場の変動等の影響に十分注意する必要があります。

国内農業では、農業従事者の高齢化や後継者不足、耕作面積の減少や耕作放棄地の増加など依然として厳しい状況にあります。このような状況下において政府は、SDGsや環境への対応を重視する国内外の動きが加速していく中で、食料・農林水産業の生産力向上と持続性の両立をイノベーションで実現させるため、中長期的な観点から戦略的に取り組む政策方針として2021年5月に「みどりの食料システム戦略」を策定し、取り組みを推進しております。一方、海外では、世界的な人口の増加や新興国経済の成長による農作物需要の拡大基調が今後も続くと予想されます。

ファインケミカル業界では、半導体のFA（Factory automation）機器やデータセンター向けなどの需要拡大、自動車向けの供給逼迫の継続など、フォトレジスト分野等を中心に、国内外において堅調な動向にあります。一方足元では、インフレの進行と個人消費などの動向が懸念されますが、中長期的には、自動車のエレクトロニクス化や新たな情報通信技術の進展等による需要拡大が期待されます。

繊維業界では、中国でのゼロコロナ政策に伴う主要都市のロックダウンにより、世界的に生産拠点の再構築・再整備を迫る結果となりました。一方、環境負荷の軽減については、環境対応型繊維素材の開発等、国内外で環境対応への取り組みは大きく進展しました。この結果、バリューアップやコストダウンへの取り組みの違いから企業業績の回復は斑模様となり、先行き不透明な状況が今後も続くものと予想されます。

このような状況のもと、当社グループにおきましては、「収益構造改革」、「造り方改革」、「働き方改革」の三つの改革を柱とした5ヵ年経営計画「HOKKO Value Up Plan 2030 1st Stage for Creation」（2021年11月期～2025年11月期）の経営目標達成に向けて、新製品の普及や新規受託品の受注活動に注力しております。また、企業理念に基づき「SDGsへの取り組み方針」を定め、その達成を目指しております。

当連結会計年度における当社グループの売上高は、農薬事業並びにファインケミカル事業における販売が好調に推移し、加えて為替が円安に進行したことから、44,864百万円、前連結会計年度比4,577百万円（11.4%）の増収となりました。

利益面では、コロナ禍からの営業活動正常化に伴う経費や燃料価格上昇に伴う運賃・倉敷料等の増加が見られたものの、特にファインケミカル事業において売上高の増加に加え、原材料高騰等の原価上昇に対して販売価格の改定に努めたことにより、営業利益は、4,727百万円、前連結会計年度比1,862百万円（65.0%）の増加となりました。また、経常利益は、円安進行に伴う為替差益の計上等により、5,905百万円、前連結会計年度比2,061百万円（53.6%）の増加となりました。この結果、親会社株主に帰属する当期純利益は、4,214百万円、前連結会計年度比1,287百万円（44.0%）の増加となりました。

事業別の状況は以下のとおりです。

〔農薬事業〕

農薬事業の売上高は、国内販売における園芸剤の受注増、海外販売におけるアジア向け並びに中南米向けの需要が堅調だったことから、24,661百万円、前連結会計年度比540百万円（2.2%）の増収となりました。営業利益は、売上高の増加により、70百万円となりました。

〔ファインケミカル事業〕

ファインケミカル事業の売上高は、樹脂分野や電子材料分野の販売が好調に推移したことから、18,618百万円、前連結会計年度比3,959百万円（27.0%）の増収となりました。営業利益は、売上高の増加に加え、原材料高騰等の原価上昇に対して販売価格改定に努めたことにより、4,621百万円、前連結会計年度比1,577百万円（51.8%）の増加となりました。

〔繊維資材事業〕

繊維資材事業の売上高は、生産面や物流面の停滞の影響はあったものの、ヨーロッパのハイブランド向け売上を拡大したことから、1,570百万円、前連結会計年度比81百万円（5.5%）の増収となりました。営業利益は、売上高の増加に加え、原材料価格や諸コストの上昇に適切に対応したことにより、40百万円、前連結会計年度比2百万円（4.9%）の増加となりました。

財政状態の状況

当連結会計年度末における資産の残高は57,566百万円となり、前連結会計年度比5,579百万円の増加となりました。内訳として、商品及び製品、建物及び構築物、機械装置及び運搬具、投資有価証券が増加しております。

負債の残高は19,325百万円となり、前連結会計年度比1,558百万円の増加となりました。内訳として、未払金、未払法人税等、繰延税金負債が増加した一方、支払手形及び買掛金、短期借入金が減少しております。

純資産の残高は38,240百万円となり、前連結会計年度比4,021百万円の増加となりました。

以上の結果、自己資本比率は66.4%となり、前連結会計年度の65.8%から0.6ポイント増加しました。

キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、法人税等の支払、有形固定資産の取得による支出等の要因により一部相殺されたものの、税金等調整前当期純利益5,792百万円等の増加により、前連結会計年度末に比べ493百万円増加し、当連結会計年度末は4,814百万円となりました。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動による資金の増加は、3,869百万円となりました。これは主に、棚卸資産の増加1,166百万円はありましたが、税金等調整前当期純利益5,792百万円、減価償却費1,374百万円を計上したことによるものであります。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動による資金の減少は、2,809百万円となりました。これは主に、有形固定資産の取得2,724百万円によるものであります。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動による資金の減少は、691百万円となりました。これは主に、短期借入金の返済149百万円、配当金の支払542百万円によるものであります。

生産、受注及び販売の実績

1) 生産実績

当連結会計年度の生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日) (百万円)	前年同期比(%)
農薬事業	14,409	103.6
ファインケミカル事業	9,779	114.8
合計	24,188	107.8

(注) 1. 金額は、製品製造原価で表示しております。

2. 繊維資材事業及びその他につきましては、生産実績がないため記載を省略しております。

2) 商品仕入実績

当連結会計年度の商品仕入実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日) (百万円)	前年同期比(%)
農薬事業	5,427	107.7
ファインケミカル事業	2,952	242.8
繊維資材事業	1,389	105.8
その他	9	84.2
合計	9,777	129.0

(注) 金額は、実際仕入額で表示しております。

3) 受注実績

当社グループは、受注生産の規模は小さいため、受注実績は記載しておりません。

4) 販売実績

当連結会計年度の販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日) (百万円)	前年同期比(%)
農薬事業	24,661	102.2
ファインケミカル事業	18,618	127.0
繊維資材事業	1,570	105.5
その他	15	80.2
合計	44,864	111.4

(注) 最近2連結会計年度の主な相手先別の販売実績および当該販売実績に対する割合は次のとおりであります。

相手先	前連結会計年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)		当連結会計年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)	
	金額 (百万円)	割合(%)	金額 (百万円)	割合(%)
全国農業協同組合連合会	17,869	44.4	17,388	38.8
信越化学工業株式会社	5,501	13.7	6,457	14.4

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末において判断したものであります。

当連結会計年度の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

当連結会計年度における当社グループの売上高は、農薬事業並びにファインケミカル事業における販売が好調に推移し、加えて為替が円安に進行したことから、44,864百万円、前連結会計年度比4,577百万円(11.4%)の増収となりました。

利益面では、コロナ禍からの営業活動正常化に伴う経費や燃料価格上昇に伴う運賃・倉敷料等の増加が見られたものの、特にファインケミカル事業において売上高の増加に加え、原材料高騰等の原価上昇に対して販売価格の改定に努めたことにより、営業利益は、4,727百万円、前連結会計年度比1,862百万円(65.0%)の増加となりました。また、経常利益は、円安進行に伴う為替差益の計上等により、5,905百万円、前連結会計年度比2,061百万円(53.6%)の増加となりました。この結果、親会社株主に帰属する当期純利益は、4,214百万円、前連結会計年度比1,287百万円(44.0%)の増加となりました。

事業別の状況は以下のとおりです。

〔農薬事業〕

農薬製品の国内販売は主に園芸剤の受注増により増加しました。また、農薬製品の海外販売はアジア向け並びに中南米向けの販売が好調に推移し増加しました。これにより、農薬事業における輸出割合は14.9%に上昇しております。(前連結会計年度の輸出割合は11.3%)

この結果、本セグメントの売上高は24,661百万円となり前連結会計年度比540百万円(2.2%)の増収となりました。営業利益は、売上高の増加により70百万円となりました。

〔ファインケミカル事業〕

ファインケミカル製品の売上高は樹脂分野および電子材料分野の販売が好調に推移したことから増加となりました。この結果、本セグメントの売上高は18,618百万円となり前連結会計年度比3,959百万円(27.0%)の増収となりました。営業利益は、原材料高騰等の原価上昇に対し販売価格の改定に努めたことにより4,621百万円となり、前連結会計年度比1,577百万円(51.8%)の増加となりました。営業利益率も24.8%と前連結会計年度比4.1%向上しております。

<ファインケミカル製品の主な用途>

- 医農薬分野
 - ・医薬、農薬原料および中間体
- 電子材料分野
 - ・半導体封止剤用の硬化促進剤(CPU、メモリー等)
 - ・フォトレジスト用のモノマー原料
(KrF約70%、ArF約10%、EUV約10%)
 - ・有機EL等
- 樹脂分野
 - ・石化用触媒(主にTPP)
 - ・その他樹脂用料(塗料、コーティング剤等)
- その他
 - ・食品飼料(TPP:ビタミンA、ベータカロチン用途等)、化粧品、エネルギー等

〔繊維資材事業〕

繊維資材の売上高は、消費回復の遅れ等の影響もあるなかで、ヨーロッパのハイブランド向け販売を拡大したことから、増加となりました。この結果、本セグメントの売上高は、1,570百万円となり前連結会計年度比81百万円(5.5%)の増収となりました。営業利益は、原材料価格上昇等にも適切に対応したことから40百万円となり、前連結会計年度比2百万円(4.9%)の増加となりました。

当社グループの経営成績に重要な影響を与える要因

当社グループの経営成績に重要な影響を与える要因としては、原材料調達や価格の動向、市場動向、為替動向、国内外の法令及び政治・経済動向等があります。

資材調達につきましては、調達ルートが多様化、調達方法の高度化を推進しております。市場動向、顧客ニーズの変化につきましては以下のとおりです。

農薬事業においては、国内生産者の高齢化による耕作地減少や新興国を中心とした購買力増大による海外市場拡大等を踏まえ、付加価値の高い製品開発とラインナップの強化、グローバル化に対応した新原体の創製に取り組んでまいります。

ファインケミカル事業においては、顧客要求の高度化・多様化やファブレス化の進展に伴う受託機会の増加傾向等を踏まえ、コア技術のさらなる進化と独自製品の開発、アライアンス等による新規ビジネス創出に取り組んでまいります。

国内外の法令や政治・経済動向等につきましては、企画部を中心に、情報を入手するとともに、海外子会社及び関係会社と連携・情報共有を図ることで対応を行っております。

なお、当社グループの経営成績及び財政状態に重要な影響を与える主要なリスクにつきましては、「第2 事業の状況 2 事業等のリスク」に記載のとおりです。

財政状態の状況

財政状態の状況につきましては、「第2 事業の状況 3 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 財政状態の状況」に記載のとおりであります。

キャッシュ・フローの状況

キャッシュ・フローの状況につきましては、「第2 事業の状況 3 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 キャッシュ・フローの状況」に記載のとおりであります。

資本の財源及び資金の流動性

当社グループの資金需要のうち主なものは、新剤開発・登録等にかかる研究開発費や生産設備の増強及び生産効率化に係る設備投資であり、これらは主に自己資金並びに金融機関からの借入金により調達しております。また、当連結会計年度末における現金及び現金同等物の残高は4,814百万円であり、資金の流動性を確保しております。

重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる会計基準に基づき作成されております。この連結財務諸表作成にあたって、必要と思われる見積りは合理的な基準に基づいて実施しております。詳細につきましては、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項) 4. 会計方針に関する事項」に記載のとおりであります。

経営方針・経営戦略、経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

当社グループでは、売上高、経常利益、売上高経常利益率、ROE、自己資本比率を重要な経営指標と認識し、目標を設定しています。

当該数値目標については「第2 事業の状況 1 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等 (2) 経営計画〔中期経営計画 「HOKKO Value Up Plan 2030 1st Stage for Creation」 経営目標」に記載のとおりです。

当連結会計年度の売上高は44,864百万円、経常利益は5,905百万円、売上高経常利益率は13.2%、ROEは11.6%、自己資本比率は66.4%となりました。

4【経営上の重要な契約等】

提出会社

契約締結先	契約内容	契約締結年月日	有効期間
全国農業協同組合 連合会	農薬製品の売買に関する 売買基本契約	平成16年3月2日	平成15年10月1日から平成16年11月30日 までとする。ただし、期間満了の1か 月前までに甲・乙いずれからも文書 による別段の意思表示がないときは、 さらに1年間延長するものとし、以後 これに準じ延長できるものとする。

契約締結先	契約内容	契約締結年月日	有効期間
全国農業協同組合 連合会	令和4年度の農薬の 売買価格等を定めた 契約	令和4年1月5日	令和3年12月1日から令和4年11月30 日出荷分とする。
全国農業協同組合 連合会	令和5年度の農薬の 売買価格等を定めた 契約	令和5年2月7日	令和4年12月1日から令和5年11月30 日出荷分とする。

5【研究開発活動】

新製品の研究開発につきましては、自社独自品の研究開発を重点的に推進するとともに、市場の変化と新しいニーズに対応できる高い商品性と競争力のある新製品の開発・導入に努め、商品の品揃えと品目構成の拡充強化をはかっております。

なお、当連結会計年度の研究開発費は、1,489百万円であり、セグメント別の研究開発活動の概要は次のとおりであります。

農薬事業

農薬事業では、新製品の研究開発に鋭意努め、水稲用除草剤において当社独自の省力・高拡散性製剤“楽粒”のさらなる開発に重点的に取り組み、「ノックアウト楽粒」が新規に農薬登録されました。

なお、当事業に係る研究開発費は、1,263百万円であります。

ファインケミカル事業

ファインケミカル事業では、付加価値の高い製品開発のために電子材料原料、医農薬中間体、有機合成触媒、高機能性無機素材などの製品開発を行っております。

なお、当事業に係る研究開発費は、226百万円であります。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当社グループでは、生産設備の維持、増強を目的とした設備の更新並びに環境・安全対策を目的とした設備の改善・更新を継続的に行っており、当連結会計年度の設備投資総額は、3,895百万円となりました。

セグメント別の設備投資については、次のとおりであります。

(1) 農薬事業

当連結会計年度の設備投資額は、2,677百万円であり、主なものは北海道工場の新工場（除草剤工場）の建設です。

(2) ファインケミカル事業

当連結会計年度の設備投資額は、1,212百万円であります。

(3) 繊維資材事業

当連結会計年度の設備投資額は、4百万円であります。

(4) その他事業

当連結会計年度の設備投資額は、1百万円であります。

2【主要な設備の状況】

当社グループにおける主要な設備は、以下のとおりであります。

(1) 提出会社

2022年11月30日現在

事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	帳簿価額					従業員数 (人)
			建物及び 構築物 (百万円)	機械装置 及び運搬具 (百万円)	土地 (百万円) (面積㎡)	その他 (百万円)	合計 (百万円)	
北海道工場 (滝川市)	農業事業	農業製造設備	1,454	2,034	8 (52,793)	38	3,534	41 (16)
新潟工場 (新発田市他)	農業事業	農業製造設備	650	295	373 (128,401)	22	1,340	75 (17)
岡山工場 (玉野市)	農業事業 ファインケミカル事業	農業製造設備 化成品合成設備	2,095	1,572	307 (187,202)	38	4,013	180 (55)
開発研究所 化成品研究所 (厚木市他)	農業事業 ファインケミカル事業	農業の研究開発 化成品の研究開発	597	11	18 (21,250)	82	708	95 (28)

(2) 国内子会社

2022年11月30日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額					従業員数 (人)
				建物及び 構築物 (百万円)	機械装置 及び運搬具 (百万円)	土地 (百万円) (面積㎡)	その他 (百万円)	合計 (百万円)	
美瑛白土工業(株)	美瑛工場 (北海道美瑛町)	農業事業	農業原料製造設備	31	23	5 (35,118)	3	62	7 (1)

(3) 在外子会社

2022年11月30日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額					従業員数 (人)
				建物及び 構築物 (百万円)	機械装置 及び運搬具 (百万円)	土地 (百万円) (面積㎡)	その他 (百万円)	合計 (百万円)	
張家港北興化工 有限公司	本社工場 (中国江蘇省)	ファインケミカル事業	化成品合成設備	210	656	- (-)	528	1,395	91 (-)

(注) 1. 帳簿価額のうち「その他」は、工具器具備品、借地権及び建設仮勘定であります。

2. 従業員数の()は、年間の平均臨時員数を外書しております。

3. 上記の他、賃借している主要な設備として以下のものがあります。

提出会社

事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	年間賃借料 (百万円)
本社 (東京都中央区)	農業事業 ファインケミカル事業	事務所(賃借)	142

3【設備の新設、除却等の計画】

当社グループの設備投資については、投資効率等を総合的に勘案して策定しております。
なお、当連結会計年度末現在における重要な設備の新設、改修計画は次のとおりであります。

(1) 重要な設備の新設等
該当事項はありません。

(2) 重要な設備の改修等

会社名	所在地	セグメント の名称	設備の内容	投資予定金額		資金調達 方法	着手及び完了予定		完成後の 増加能力
				総額 (百万円)	既支払額 (百万円)		着手	完了	
提出 会社	北海道 滝川市	農業事業	農薬製造設備	136	30	自己資金	2022年9月	2023年11月	(注)
提出 会社	新潟県 新発田市	農業事業	農薬製造設備	333	172	自己資金	2022年8月	2023年11月	(注)
提出 会社	岡山県 玉野市	農業事業 ファインケミカル事業	農薬製造設備 化成品合成設備	30 457	2 20	自己資金	2022年10月 2022年12月	2023年11月 2023年11月	(注)

(注) 主に設備の改善維持を図るもので、生産能力に大きな変動はありません。

(3) 重要な設備の除却等
該当事項はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	92,000,000
計	92,000,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数 (株) (2022年11月30日)	提出日現在発行数 (株) (2023年2月22日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	29,985,531	29,985,531	東京証券取引所 (スタンダード市場)	・権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式 ・単元株式数 100株
計	29,985,531	29,985,531	-	-

(2)【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金 増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
1992年11月30日	13	29,985	8	3,214	-	2,608

(注) 上記の増加は、転換社債の株式転換による増加(自 1991年12月1日 至 1992年11月30日)によるものであります。

(5) 【所有者別状況】

2022年11月30日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満株式の状況(株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	-	16	34	82	75	5	4,801	5,013	-
所有株式数(単元)	-	87,770	13,357	79,731	20,300	29	98,368	299,555	30,031
所有株式数の割合(%)	-	29.30	4.46	26.62	6.78	0.01	32.84	100.00	-

(注) 1. 自己株式2,904,387株は、「個人その他」に29,043単元および「単元未満株式の状況」に87株をそれぞれ含めて記載しております。

2. 「その他の法人」の欄には、証券保管振替機構名義の株式が30単元含まれております。

(6) 【大株主の状況】

2022年11月30日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町2-11-3	2,715	10.03
野村殖産株式会社	大阪府大阪市中央区高麗橋2-1-2	2,103	7.77
住友化学株式会社	東京都中央区日本橋2-7-1	1,968	7.27
株式会社日本カストディ銀行(信託口)	東京都中央区晴海1-8-12	1,580	5.84
株式会社りそな銀行	大阪府大阪市中央区備後町2-2-1	1,352	4.99
BNP PARIBAS LUXEMBOURG/2S/JASDEC/FIM/LUXEMBOURG FUNDS/UCITS ASSETS (常任代理人 香港上海銀行東京支店)	33 RUE DE GASPERICH, L-5826 HOWALD-HESPERANGE, LUXEMBOURG (東京都中央区日本橋3-11-1)	1,125	4.15
北興化学工業従業員持株会	東京都中央区日本橋本町1-5-4	1,041	3.84
農林中央金庫	東京都千代田区大手町1-2-1	868	3.21
野村ホールディングス株式会社	東京都中央区日本橋1-13-1	836	3.09
全国農業協同組合連合会	東京都千代田区大手町1-3-1	801	2.96
計	-	14,391	53.14

(注) 1. 信託銀行等の信託業務に係る株式数については、当社として把握することができないため、株主名簿上の名義で所有株式数を記載しております。

2. 2022年12月5日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書の変更報告書において、野村證券株式会社およびその共同保有者4社が2022年11月29日現在で以下の株式を所有している旨が記載されているものの、当社として2022年11月30日時点における実質所有株式数の確認ができませんので、上記「大株主の状況」には含めておりません。

保有者 野村證券株式会社およびその共同保有者4社
保有株券等の数 2,428千株
株券等保有割合 8.10%

3. 2022年12月7日付でS M B C日興証券株式会社より提出されている大量保有報告書の変更報告書において、2022年11月30日現在で以下の株式を所有している旨が記載されているものの、当社として2022年11月30日時点における実質所有株式数の確認ができませんので、上記「大株主の状況」には含めておりません。

保有者 株式会社三井住友銀行および三井住友D Sアセットマネジメント株式会社
保有株券等の数 2,590千株
株券等保有割合 8.64%

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

2022年11月30日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 2,904,300	-	権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式
完全議決権株式(その他)	普通株式 27,051,200	270,512	同上
単元未満株式	普通株式 30,031	-	同上
発行済株式総数	29,985,531	-	-
総株主の議決権	-	270,512	-

(注) 「完全議決権株式(その他)」欄には、証券保管振替機構名義の株式が3,000株(議決権の数30個)含まれております。

【自己株式等】

2022年11月30日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数の 割合(%)
(自己保有株式) 北興化学工業株式会社	東京都中央区日本橋本町 一丁目5番4号	2,904,300	-	2,904,300	9.68
計	-	2,904,300	-	2,904,300	9.68

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

会社法第155条第7号による取得

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	526	494,548
当期間における取得自己株式	18	14,202

(注) 当期間における取得自己株式には、2023年2月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

(4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式				
消却の処分を行った取得自己株式				
合併、株式交換、株式交付、会社分割に係る移転を行った取得自己株式				
その他 (単元未満株式の買増請求による売渡)				
保有自己株式数	2,904,387		2,904,405	

(注) 1. 当期間における処理自己株式には、2023年2月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の売渡による株式は含まれておりません。

2. 当期間における保有自己株式数には、2023年2月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りおよび買増しによる株式数は含めておりません。

3【配当政策】

当社は、株主の皆様への安定的な利益配分の継続を基本方針とし、内部留保の蓄積や成長投資とのバランスを図りつつ、利益の動向に応じた株主還元の実施を目指し、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を実施しております。

これらの剰余金の配当決定機関は、中間配当については取締役会、期末配当については株主総会であります。

当社の配当金につきましては、上記の方針に基づき中間配当として1株につき10円、期末配当金として1株につき11円、当期の年間配当額は1株につき21円とさせていただきます。

内部留保資金につきましては、研究開発や設備投資などの資金需要に充当するとともに、財務体質強化のために役立ててまいります。

当社は、「取締役会の決議により毎年5月31日を基準日として、中間配当を行うことができる。」旨を定款に定めております。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額（百万円）	1株当たりの配当額（円）
2022年7月8日 取締役会決議	271	10.0
2023年2月22日 定時株主総会決議	298	11.0

4【コーポレート・ガバナンスの状況等】

（1）【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

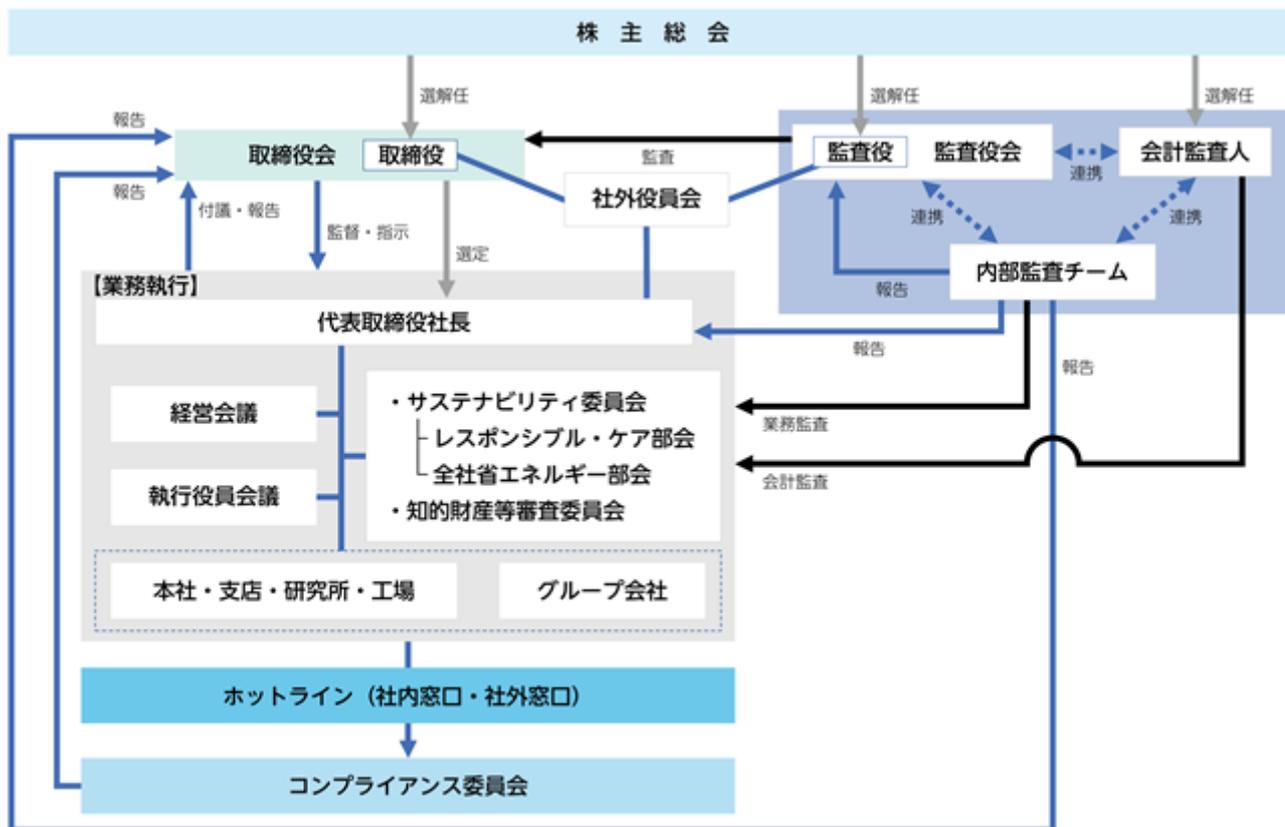
当社は、「企業理念」「経営の基本方針」の実践を通じて、持続的に成長し、中長期的な企業価値を向上させるため、当社にとって最良のコーポレートガバナンスを追求してまいります。

当社は、持続的な成長および中長期的な企業価値の向上を図るためには、ステークホルダーとの協働や高いコンプライアンス意識の維持が重要であるとの認識に立ち、次の基本的な考え方に沿って、コーポレートガバナンスの充実に取り組んでまいります。

- ・株主の権利を尊重し、株主の実質的な平等性を確保します。
- ・経営の透明性確保に向け、会社情報の適切な開示を行います。
- ・株主との建設的な対話を促進する体制を確保します。
- ・株主、取引先、地域社会をはじめとした様々なステークホルダーとの適切な協働に努めるとともに、健全な業務運営を行う企業文化・風土を醸成します。
- ・取締役会や監査役会の機能の実効性向上に努めます。

コーポレート・ガバナンス体制の概要および当該体制を採用する理由
イ.当社のコーポレート・ガバナンス体制の概要は以下のとおりです。

コーポレート・ガバナンス体制(有価証券報告書提出日 現在)



当社は監査役設置会社の形態を採用しており、取締役の職務執行について、取締役会が監督を行い、監査役が監査を行う体制です。業務執行については、執行役員制度の採用により、取締役会の監督の下、執行役員がそれを担っております。監査については、監査役、業務執行部門から独立した内部監査チーム、会計監査人が相互に連携することにより、実効性向上に努めております。

当社の各機関の概要は以下のとおりです。

(取締役会)

- ・取締役会は、有価証券報告書提出日現在、社外取締役5名を含む9名で構成し、審議や意思決定における十分性・迅速性等の点で効果的・効率的な規模、かつ経営の執行機能と監督機能が十分発揮できる構成としております。
- ・取締役会は、重要事項について意思決定するとともに、取締役の職務執行を監督しており、重要事項以外の意思決定は業務執行取締役に委任しております。
- ・取締役会は、原則月1回開催し、重要事項の意思決定や職務執行の監督に関し、必要な事項を審議しております。
- ・取締役会の構成員は以下のとおりです。

取締役	佐野健一(議長)	早川伸一	鳥居高行	濱田尚之	
社外取締役	垂水裕之	田口芳樹	石尾 勝	高山 清	中川登紀子
監査役	神原靖夫	米田浩人			
社外監査役	福井尚二	後藤周司			

(監査役・監査役会)

- ・監査役会は、有価証券報告書提出日現在、社外監査役2名を含む4名で構成しております。
- ・監査役会は、原則月1回開催し、監査に関する重要な事項等につき協議・決議するとともに、監査役、内部監査チームおよび会計監査人からの報告を受けるほか、意見交換等を行っております。
- ・監査役は、監査役会で定めた監査方針や監査計画に基づき、取締役会や経営会議等、重要な会議への出席や、重要な決裁書類の閲覧および主要な事業所における業務や財産の状況の調査等を通じて、監査を行っております。
- ・監査役会の構成員は以下のとおりです。

監査役	神原靖夫(議長)	米田浩人
社外監査役	福井尚二	後藤周司

(経営会議)

- ・業務執行取締役および社長が指名する執行役員等で構成し、原則月1回以上開催しております。取締役会に付議する事項など、経営に関する重要事項および重要な業務執行案件の審議等を行っております。
- ・経営会議の構成員は以下のとおりです。

取締役	佐野健一(議長)	早川伸一	鳥居高行	濱田尚之
監査役	神原靖夫	米田浩人		
執行役員	榎本浩巳			

(執行役員会議)

- ・業務執行取締役および執行役員等で構成し、原則月1回開催しております。業務執行に関する現況等の報告のほか、業務執行に関する協議、取締役会や経営会議での決定事項の連絡等を行い、業務執行体制の強化を図っております。
- ・執行役員会議の構成員は以下のとおりです。

取締役	佐野健一(議長)	早川伸一	鳥居高行	濱田尚之	
監査役	神原靖夫	米田浩人			
執行役員	横山 毅	小林茂之	陽山幸一	宮崎泰典	榎本浩巳
開発研究所長	齋藤泰彦				
北海道工場長	小坂彰人				
新潟工場長	布川 修				

(サステナビリティ委員会)

・委員長である社長と企画管理グループ担当役員、事業グループの担当役員等からなる委員により構成し、SDGsの達成に向けた取り組み、気候変動対策などサステナビリティに関する当社グループの取り組みを、総合的かつ効果的に推進するために協議を行い、その結果を経営会議に報告しております。また、サステナビリティ委員会の下部組織として、レスポンシブル・ケア部会、全社省エネルギー部会を設置しております。

(レスポンシブル・ケア部会)

・委員長である企画管理グループ担当役員と事業グループの担当役員等からなる委員により構成し、レスポンシブル・ケアに関する基本方針や目標・計画等の協議を行い、その結果を経営会議に報告しております。

(全社省エネルギー部会)

・委員長である企画管理グループ担当役員と企画管理部門、製造部門の長等からなる委員により構成し、中長期的な目標、設備投資計画、全社のエネルギー使用状況の把握と改善策、カーボンニュートラルへの取り組みの協議を行い、その内容を経営会議に報告しております。

(知的財産等審査委員会)

・社長が任命した委員長と委員により構成し、事業競争力を強化するために知的財産創出の奨励および創出した知的財産の権利化・維持方針の協議を行い、委員会の審査結果等は定期的に経営会議に報告しております。

(コンプライアンス委員会)

・社長が任命した委員長と委員により構成し、コンプライアンスに関する基本方針やコンプライアンス推進に関する組織・体制や計画等の協議を行うほか、コンプライアンスに違反する事案の調査の総括を行い、必要に応じ、取締役会、社長、監査役等に報告しております。

ロ.当該体制を選択している理由

当社では、取締役会が審議や意思決定における十分性・迅速性等の点で効果的・効率的な規模であり、かつ経営の執行機能と監督機能が十分発揮できる構成となっていること、「社外役員の独立性に関する基準」に基づき選任した独立社外取締役および独立社外監査役により経営への監督・監視機能の強化を図っていること、取締役(会)・監査役(会)をサポートする体制が適切に整備されていること、監査役(会)と会計監査人、内部監査部門の連携等により監査の機能が適切に発揮されていることから現状のコーポレートガバナンス体制の有効性が十分確保されていると判断し選択しております。

企業統治に関するその他の事項

当社グループは、共通の企業理念のもと、法令等を順守し、「法令等順守基本規程」、「北興化学工業グループ行動規範」および社会的規範に基づき業務運営を行っております。

「関係会社管理規程」に基づき、子会社の業務担当役員等は当該子会社の業務管理を行い、企画管理グループ担当役員が子会社の総括管理を行っております。

企画管理グループ担当役員は、子会社代表取締役に運営状況や月次損益等を取りまとめた管理月報の提出を求め、必要な都度、子会社に直接、確認しております。

当社取締役・執行役員等が子会社の代表取締役、非常勤または常勤取締役に就任することなどにより、子会社の情報収集を充実させ、リスクを把握し、管理しております。

子会社の業務担当役員等は、子会社の業務の状況を、定期的に当社の取締役会に報告しております。

子会社の業務担当役員等は、法令並びに「関係会社管理規程」に定める子会社の重要事項について、子会社取締役と必要な協議を行い、一定の事項については子会社取締役会決議前に当社経営会議に付議し、承認を得ております。

内部監査チームは、子会社の適正な業務運営について監査するとともに、適切に指示および指導・助言をしております。

全社的なリスクを総合的に管理するために、「リスク管理規程」を定め、経営リスク全般については、企画管理グループ担当役員が総合的に管理し、各業務分野でのリスクについては、各業務担当取締役等がリスクの把握、管理、対応にあっております。

業務担当取締役等は、重要な損失が発生し、または予測される場合は、「経営危機対応規程」に基づき、直ちに社長に報告することとしております。重大な法令違反または損失が発生、もしくは予測される場合は、社長を本部長とする対策本部を設置し、迅速に損失拡大防止等の対応にあたることとしております。

「サステナビリティ委員会」にレスポンシブル・ケア部会を設置し、レスポンシブル・ケアに関する方針や目標、計画等の協議を行っております。また、企画部はレスポンシブル・ケアに関する監査を行い、監査結果を定期的にレスポンシブル・ケア部会に報告しております。

内部監査チームは、各分野におけるリスクの管理状況について監査を行い、監査報告書を作成し社長に報告しております。また、定期的に内部監査の状況を取締役会、監査役に報告しております。

弁護士と顧問契約を締結し、法律上の判断を必要とする場合に適時アドバイスを受けております。

責任限定契約の内容の概要

当社は、各社外取締役および各社外監査役との間で、会社法第427条第1項および定款の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、その職務を行うにつき善意で、かつ重大な過失がないときは、会社法第425条第1項に定める最低責任限度額としております。

役員等賠償責任保険契約の内容の概要等

当社は、会社法第430条の3第1項に規定する役員等賠償責任保険契約を保険会社との間で締結しております。当該保険契約の被保険者の範囲は、当社および当社の子会社の取締役、監査役、執行役員(当事業年度に在任していた者を含む。)等であり、保険料は全額当社が負担しております。

当該保険契約の内容の概要は、被保険者が、その職務の執行に関し責任を負うこと又は当該責任の追及に係る請求を受けることによって生ずることのある損害を当該保険契約により保険会社が補填するものであり、1年毎に更新契約しております。次回更新時には同内容での更新を予定しております。

取締役の定数

当社の取締役は12名以内とする旨を定款に定めております。

取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨を定款に定めております。また、取締役の選任決議は累積投票によらない旨を定款に定めております。

株主総会決議事項を取締役会で決議することができる事項

イ 自己株式の取得

当社は、自己株式の取得について、機動的な資本政策の遂行を可能とするため、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる旨を定款に定めております。

ロ 中間配当

当社は、機動的な利益還元を行うことを目的として、取締役会決議により、毎年5月31日を基準日として中間配当を行うことができる旨を定款に定めております。

株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(2) 【役員の状況】

役員一覧

男性12名 女性1名 (役員のうち女性の比率7.7%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
代表取締役社長	佐野 健一	1957年8月4日生	1981年4月 当社入社 2005年7月 当社営業企画部次長 2007年4月 当社企画部次長 2012年2月 当社総務部長 2014年2月 当社執行役員企画管理グループ副担当企画部長兼総務部長 2016年2月 当社取締役執行役員企画管理グループ担当企画部長兼総務部長 2016年7月 当社取締役執行役員農薬事業グループ副担当営業部長 2018年2月 当社取締役常務執行役員農薬事業グループ担当営業部長 2019年7月 当社取締役常務執行役員農薬事業グループ担当 2019年12月 当社代表取締役社長(現任)	(注)4	24,800
取締役 常務執行役員 農薬事業グループ担当	早川 伸一	1960年5月29日生	1985年4月 当社入社 2013年1月 当社東京支店長 2014年7月 当社製品企画部長 2017年7月 当社執行役員製品企画部長 2019年12月 当社執行役員農薬事業グループ副担当製品企画部長 2021年2月 当社取締役執行役員農薬事業グループ担当製品企画部長 2021年7月 当社取締役常務執行役員農薬事業グループ担当製品企画部長 2022年7月 当社取締役常務執行役員農薬事業グループ担当製品企画部長兼営業部長 2022年12月 当社取締役常務執行役員農薬事業グループ担当営業部長(現任)	(注)4	21,800
取締役 常務執行役員 企画管理グループ担当	鳥居 高行	1963年10月3日生	1986年4月 ㈱大和銀行(現㈱りそな銀行)入行 2013年4月 ㈱りそな銀行執行役員融資企画部担当 2013年4月 ㈱りそなホールディングス執行役信用リスク統括部担当 2014年4月 ㈱りそな銀行執行役員融資企画部担当兼リスク統括部担当 2014年4月 ㈱りそなホールディングス執行役リスク統括部担当兼信用リスク統括部担当 2017年4月 ㈱りそな銀行常務執行役員決済事業部担当 2017年4月 ㈱りそなホールディングス執行役決済事業部担当 2019年4月 ㈱りそな銀行専務執行役員決済事業部担当 2021年6月 当社常勤顧問 2021年9月 当社常務執行役員企画部長 2022年2月 ホクコーパックス㈱代表取締役 2023年2月 当社取締役常務執行役員企画管理グループ担当(現任) 2023年2月 村田長㈱代表取締役社長(現任)	(注)4	1,000

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役 執行役員 ファインケミカル事業グループ担当	濱田 尚之	1965年9月22日生	1988年4月 当社入社 2014年12月 当社岡山工場ファインケミカル製造部長 2017年12月 当社企画部長 2021年2月 当社執行役員企画部長 2021年9月 当社執行役員ファインケミカル事業グループ副担当 2022年2月 当社取締役執行役員ファインケミカル事業グループ担当(現任) 2022年2月 張家港北興化工有限公司董事長(現任)	(注)4	2,900
取締役	垂水 裕之	1951年8月12日生	1975年4月 三菱商事(株)入社 2002年4月 同社非鉄金属本部銅地金事業ユニットマネジャー 2005年4月 同社金属グループCEOオフィス室長 2006年4月 同社執行役員米国三菱商事EVP 2009年4月 同社アフリカChief Regional Officer 兼ヨハネスブルグ支店長 2011年4月 同社顧問 2012年5月 三菱マテリアル(株)顧問バンクーバー支店長 2015年5月 Huckleberry Mines Ltd. 社長 2019年2月 当社取締役(現任)	(注)4	-
取締役	田口 芳樹	1959年1月19日生	1981年4月 野村建設工業(株)入社 2006年6月 同社東京営業部長 2012年7月 野村殖産(株)総務部長 2012年11月 ヤマト インターナショナル(株)監査役 2013年6月 野村殖産(株)取締役総務部長 2017年12月 ノムラ・ジャパン(株)監査役 2018年6月 野村殖産(株)常務取締役総務部長 2019年6月 野村建設工業(株)監査役(現任) 2019年7月 野村殖産(株)常務取締役 2020年2月 当社取締役(現任) 2020年6月 野村殖産(株)代表取締役社長(現任) 2020年6月 野村興産(株)監査役(現任)	(注)4	-
取締役	石尾 勝	1958年1月1日生	1981年4月 日本生命保険相互会社入社 1993年10月 同社年金運用課長 1998年4月 ニッセイアセットマネジメント(株)運用室長 2001年1月 フランクリン・テンプレートン・インベストメント(株)年金業務部長 2003年3月 東京海上アセットマネジメント(株)公法人部シニアマネージャー 2007年4月 共立女子大学看護学部非常勤講師 2012年4月 厚生労働省年金局専門官 2014年5月 日本医師会総合政策研究機構主任研究員 2020年2月 当社取締役(現任) 2021年4月 専修大学兼任講師(現任)	(注)4	-
取締役	高山 清	1962年7月3日生	1987年4月 住化ファインケム(株)入社 2004年7月 住友化学工業(株)(現住友化学(株))入社 2008年7月 同社精密化学業務室主席部員 2011年4月 同社健康・農業関連事業業務室主席部員 2016年11月 EXCEL CROP CARE出向 2019年9月 住友化学インド出向 2020年1月 住友化学(株)健康・農業関連事業業務室(現任) 2021年2月 当社取締役(現任) 2021年2月 サンケイ化学(株)取締役(監査等委員)(現任)	(注)4	-

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役	中川 登紀子	1976年4月15日生	2001年4月 日本リーバ(株)(現ユニリーバ・ジャパン・ホールディングス(株))入社 2005年5月 ヘンケルジャパン(株)入社 研究開発部 2007年4月 同社マーケティング部ジュニアブライ ンドマネージャー 2008年5月 日本ロレアル(株)入社 R&Dセンターシ ニアリサーチャー 2014年6月 合同会社美容教育研究所(現合同会社 ヘアカラーマスター検定協会)代表社 員(現任) 2015年4月 ハリウッド大学院大学ビューティービ ジネス研究科 准教授(現任) 2023年2月 当社取締役(現任)	(注)4	-
常勤監査役	神原 靖夫	1958年12月19日生	1981年4月 当社入社 2006年2月 張家港北興化工有限公司副總經理 2016年2月 当社経理部長 2019年1月 当社業務担当理事経理部長 2019年3月 村田長(株)監査役 2020年2月 当社監査役(現任) 2020年2月 張家港北興化工有限公司監事(現任)	(注)5	7,200
監査役	米田 浩人	1961年11月12日生	1984年4月 当社入社 2019年7月 当社総務部長 2021年12月 当社業務担当理事総務部長 2022年2月 当社監査役(現任) 2022年2月 村田長(株)監査役(現任) 2023年2月 北興産業(株)監査役(現任) 2023年2月 美瑛白土工業(株)監査役(現任) 2023年2月 ホクコーパックス(株)監査役(現任)	(注)6	8,200
監査役	福井 尚二	1955年3月28日生	1978年4月 (株)青森銀行入行 2000年10月 同行盛岡支店長 2003年11月 同行個人部長 2006年10月 同行五所川原支店長 2008年6月 同行執行役員弘前支店長 2010年6月 同行執行役員東京支店長 2011年6月 同行取締役東京支店長 2013年6月 あおぎんリース(株)専務取締役 2014年6月 あおぎん信用保証(株)代表取締役 2014年6月 青銀甲田(株)代表取締役 2016年2月 当社監査役(現任) 2016年6月 北方商事(株)代表取締役社長 2017年2月 東洋建物管理(株)監査役 2018年6月 北方商事(株)相談役 2018年7月 中央薬品(株)専務取締役(現任)	(注)7	-
監査役	後藤 周司	1958年4月4日生	1981年4月 デュボンファーイースト入社 1993年4月 米国デュボン本社に勤務 2005年1月 デュボン(株)農薬製品事業部企画部長 2005年12月 丸和バイオケミカル(株)社外取締役 2006年1月 デュボン(株)農薬製品事業部事業部長 2006年9月 同社執行役員 2009年12月 同社常務執行役員 2014年9月 同社専務執行役員 2016年10月 デュボン・プロダクション・アグリサイ エンス(株)(現コルテバ・アグリサイ エンス日本(株))代表取締役 2017年11月 エフエムシー・ケミカルズ(株)日本代表 同社代表取締役社長 2018年9月 丸和バイオケミカル(株)特別顧問 2019年7月 丸和バイオケミカル(株)特別顧問 2021年2月 当社監査役(現任)	(注)8	-
計					65,900

- (注) 1. 取締役垂水裕之、田口芳樹、石尾勝、高山清、中川登紀子は、社外取締役であります。
2. 監査役福井尚二、後藤周司は、社外監査役であります。
3. 中川登紀子氏の戸籍上の氏名は名屋登紀子であります。
4. 2023年2月22日開催の定時株主総会の終結の時から1年間
5. 2020年2月26日開催の定時株主総会の終結の時から4年間
6. 2022年2月25日開催の定時株主総会の終結の時から2年間
7. 2022年2月25日開催の定時株主総会の終結の時から4年間
8. 2021年2月25日開催の定時株主総会の終結の時から4年間
9. 執行役員は、上記の執行役員を兼務する取締役のほか、取締役会により選任された以下の5名であります。

常務執行役員	横山 毅	製造部長
執行役員	小林 茂之	製品企画部長
執行役員	陽山 幸一	張家港北興化工有限公司總經理
執行役員	宮崎 泰典	岡山工場長
執行役員	榎本 浩巳	企画部長兼ホクコーパツクス(株)代表取締役

社外役員の状況

有価証券報告書提出日現在、取締役9名のうち5名が社外取締役、監査役4名のうち2名が社外監査役であります。

社外取締役の垂水裕之氏は、他の法人等との重要な兼職はありません。なお、同氏が2012年3月まで在籍していた三菱商事株式会社は、当社と農薬原体、化成品等の取引があり、2022年11月期における同社との取引額は、当社の売上高の1%未満と僅少であります。また、同氏が2017年3月まで在籍していた三菱マテリアル株式会社と当社との間の2022年11月期における売上・仕入の取引額は合計で3百万円未満と僅少であります。

これらの過去の在籍先と当社との関係は、当社の「社外役員の独立性に関する基準」に定める水準を超えるものではなく、一般株主との間で利益相反が生じるおそれがないと判断し、同氏を東京証券取引所の定めに基づく独立役員に指定し、同取引所に届け出ております。

社外取締役の田口芳樹氏は、野村殖産株式会社の代表取締役社長、野村建設工業株式会社、野村興産株式会社の監査役を兼職しております。野村殖産株式会社は、自己株式を除く当社の発行済株式の7.77%を保有する株主であり、当社は、同社より事務所(西日本支店)を賃借しております。2022年11月期において当社がこの賃借の対価として同社に支払った金額は、当社の販売費および一般管理費の0.2%未満と僅少であります。野村興産株式会社は、自己株式を除く当社の発行済株式の0.74%を保有する株主であります。2022年11月期において当社は同社へ産業廃棄物処理等を委託しておりますが、当社が同社に支払った金額は10万円未満と僅少であります。

これらの兼職先と当社との関係は、当社の「社外役員の独立性に関する基準」に定める水準を超えるものではなく、一般株主との間で利益相反が生じるおそれがないと判断し、同氏を、東京証券取引所の定めに基づく独立役員に指定し、同取引所に届け出ております。

社外取締役の石尾勝氏は、他の法人等との重要な兼職はありません。なお、同氏は、当社の定める「社外役員の独立性に関する基準」に適合するため、一般株主との間で利益相反が生じるおそれがないと判断し、東京証券取引所の定めに基づく独立役員に指定し、同取引所に届け出ております。

社外取締役の高山清氏は、住友化学株式会社の健康・農業関連事業業務室の室員およびサンケイ化学株式会社の取締役(監査等委員)を兼職しております。なお、住友化学株式会社は、自己株式を除く当社の発行済株式の7.27%を保有する株主であり、当社との間で農薬原体等や化成品の仕入および販売の取引があります。2022年11月期における同社との取引額は当社の仕入高の10%未満、売上高の5%未満であります。また、サンケイ化学株式会社は、当社との間で運賃等の支払実績があり、2022年11月期において当社が同社に支払った金額は、当社の販売費および一般管理費の0.2%未満と僅少であります。

社外取締役の中川登紀子氏は、合同会社ヘアカラーマスター検定協会代表社員およびハリウッド大学院大学准教授を兼職しております。合同会社ヘアカラーマスター検定協会代表社員およびハリウッド大学院と当社との間に特別な利害関係はありません。なお、同氏は、当社の定める「社外役員の独立性に関する基準」に適合するため、一般株主との間で利益相反が生じるおそれがないと判断し、東京証券取引所の定めに基づく独立役員に指定し、同取引所に届け出ております。

社外監査役の福井尚二氏は、中央薬品株式会社の専務取締役を兼職しております。中央薬品株式会社と当社との間に特別な利害関係はありません。なお、同氏は、当社の定める「社外役員の独立性に関する基準」に適合するため、一般株主との間で利益相反が生じるおそれがないと判断し、東京証券取引所の定めに基づく独立役員に指定し、同取引所に届け出ております。

社外監査役の後藤周司氏は、他の法人等との重要な兼職はありません。なお、同氏が2017年10月まで在籍していたデュポン・プロダクション・アグリサイエンス株式会社(現コルテバ・アグリサイエンス日本株式会社)は、当社と農薬原体等の仕入の取引があり、2022年11月期における同社との取引額は、当社の仕入高の0.1%未満と僅少であります。同氏が2019年5月まで在籍していたエフエムシー・ケミカルズ株式会社と当社との間には、農薬原体の仕入、受託製造等の取引があり、2022年11月期における同社の取引額は、当社の仕入高の5%未満、売上高の0.5%未満であります。また、同氏が2020年12月まで在籍していた丸和バイオケミカル株式会社と当社との間には、農薬受託製造等の取引があり、2022年11月期における同社の取引額は、当社の売上高の0.1%未満と僅少であります。

これらの過去の在籍先と当社との関係は、当社の「社外役員の独立性に関する基準」に定める水準を超えるものではなく、一般株主との間で利益相反が生じるおそれがないと判断し、同氏を、東京証券取引所の定めに基づく独立役員に指定し、同取引所に届け出ております。

当社は、社外取締役および社外監査役となる者の独立性を実質面において担保することを目的として「社外役員の独立性に関する基準」を制定し、当社ウェブサイトを通じて公表しております。

社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役は、取締役会に出席し、内部統制その他の重要案件に対して、それぞれの専門性、経験と知見に基づく発言を適宜行っており、監督機能を果たしております。

社外監査役は、取締役会および監査役会に出席し、取締役、常勤監査役および使用人等から内部監査、監査役監査、会計監査およびコンプライアンス・リスク管理等の内部統制の実施状況の報告を受け、必要に応じて説明を求め、意見を表明しております。

また、社外監査役と内部監査チームは、必要に応じて随時情報交換を行い、相互の連携を高め職務執行を十分に監視できる体制を整えております。

(3) 【監査の状況】

監査役監査の状況

イ．組織・人員

有価証券報告書提出日現在、当社の監査役は4名であり、うち2名は社外監査役であります。当社監査役会は、株主の負託を受けた独立の機関として、取締役・執行役員の職務の執行を監査することにより、当社の持続的な成長を確保し、社会的信頼に応える最良のコーポレート・ガバナンス体制を確立することを監査役および監査役会の役割・責務としております。

役割・責務を果たすにあたり、独立した客観的な立場で能動的・積極的に権限を行使することに加え、社外監査役の有する高い専門性と社内監査役の有する情報を活用することにより、実効性の高い監査の実施に努めております。

常勤監査役 神原靖夫氏は、長年当社の経理部に在籍し、財務・会計・税務等の業務を通じて、内部統制やリスク管理の強化に大きな貢献を果たしており、財務および会計に関する相当程度の知見を有するものであります。

監査役 福井尚二氏は、金融機関等での経営経験を有し、財務および会計に関する相当程度の知見を有するものであります。

ロ．監査役会の活動状況

当事業年度において、社外監査役2名、常勤監査役1名および監査役1名で構成された監査役会を13回開催いたしました。各監査役の出席率は100%となっております。

監査役会においては、監査方針や監査計画策定、監査報告書の作成および財産の状況の調査その他監査役の職務の執行に関する事項の決定を主な検討事項としております。また、会計監査人の選解任、会計監査人の報酬に関する同意等、監査役会の決議による事項について検討を行っております。

監査役は取締役会へ出席し、意見を述べ、当社グループの各拠点（支店、研究所、工場、子会社等）への監査を行っております。

また、常勤監査役・監査役は経営会議、執行役員会議、コンプライアンス委員会その他必要と認める全ての会議、委員会へ出席するとともに、議事録や決議書類の閲覧等を行い、会社の状況を把握しております。

監査役会は、会計監査人および内部監査チームと、相互の情報交換・意見交換を行う等、連携を強化し、監査の効率性を高め、実効性の向上を図っております。

当社は、監査役の監査が実効的に行われることを確保するために、毎事業年度、監査役と協議の上で必要な費用等を予算に計上し、その費用等を負担しております。

内部監査の状況

業務執行部門から独立した内部監査チーム（人員数2名）を置き、内部管理態勢の適切性、有効性等について検証・評価を行い、社長、取締役(会)、監査役(会)に監査結果を報告するとともに、監査役および会計監査人と連携し、適切な業務の指示および指導・助言に努めております。

会計監査の状況

イ．監査法人の名称

太陽有限責任監査法人

ロ．継続監査期間

1年間

ハ．業務を執行した公認会計士の氏名

業務執行社員：田尻 慶太

業務執行社員：丸田 力也

業務執行社員：山口 昌良

二．監査業務に係る補助者の構成

当連結会計年度における当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士12名、その他39名であります。

ホ．監査法人の選定方針と理由

監査役会は、当社の「監査役会規則」に基づき、監査役会の定める「会計監査人の選解任等に係る手続き」に従い、会計監査人の評価を行い、会計監査業務を遂行するうえでの能力、組織、体制、誠実性・公平性、独立性および専門性などが適格であると判断しております。

ヘ．監査役及び監査役会による監査法人の評価

監査役会は、監査役会の定める「会計監査人の選解任等に係る手続き」に基づく「会計監査人評価シート」により、会計監査人の監査遂行能力を次の観点から評価いたしました。

・信頼性、当社とのコミュニケーション、迅速性、誠実性・公正性、当社および業界の理解度、専門性、組織的な監査実施、監査報酬、指定社員、サービスの品質、監査計画、独立性および職業的懐疑心、守秘義務等法令等の遵守、監査に関する品質管理基準、など。

なお、2022年2月25日開催の第72回定時株主総会において、新たに当社の会計監査人として太陽有限責任監査法人が選任されました。同監査法人を選定した理由につきましては、下記「会計監査の状況 ト．監査法人の異動」に記した臨時報告書の記載内容をご参照ください。

ト．監査法人の異動

当社の監査法人は以下のとおり異動しております。

第72期（自 2020年12月1日 至 2021年11月30日）

（連結・個別）PwCあらた有限責任監査法人

第73期（自 2021年12月1日 至 2022年11月30日）

（連結・個別）太陽有限責任監査法人

なお、臨時報告書に記載した事項は以下のとおりです。

当該異動に係る監査公認会計士等の名称

選任する監査公認会計士等の名称

太陽有限責任監査法人

退任する監査公認会計士等の名称

PwCあらた有限責任監査法人

当該異動の年月日

2022年2月25日（第72回定時株主総会開催予定日）

退任する監査公認会計士等が監査公認会計士等となった年月日

2016年2月26日

退任する監査公認会計士等が直近3年間に作成した監査報告書等における意見等に関する事項

該当事項はありません。

当該異動の決定又は当該異動に至った理由及び経緯

当社は定期的に会計監査人を見直しておりますが、PwCあらた有限責任監査法人は就任からの継続監査期間が6期を経過しており、今般見直しの結果、新たな視点での監査が期待できることに加え、より健全な財務体制の構築につながると考え、太陽有限責任監査法人を会計監査人に選任することを決定いたしました。

上記の理由及び経緯に対する意見

退任する監査公認会計士等の意見

特段の意見はない旨の回答を得ております。

監査役会の意見

妥当であると判断しております。

監査報酬の内容等

イ．監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報酬 (百万円)	監査証明業務に基づく報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報酬 (百万円)
提出会社	48	-	36	-
連結子会社	-	-	-	-
計	48	-	36	-

ロ．監査公認会計士等と同一のネットワークに対する報酬

該当事項はありません。

ハ．その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

ニ．監査公認会計士等の提出会社及び連結子会社に対する非監査業務の内容

該当事項はありません。

ホ．監査報酬の決定方針

該当事項はありませんが、監査公認会計士等と協議したうえで、当社の規模・業務の特性等に基づいた監査計画の内容、監査時間、監査担当者等を総合的に勘案し決定しております。

ヘ．監査役会が会計監査人の監査報酬等に同意した理由

監査役会は、上記ホに基づき、監査報酬案の算定根拠などが適切であるかについて確認し、また、過去からの監査報酬額の推移および世間水準の状況等を総合的に検討した上で、会計監査人の報酬等の額は妥当と判断し、会社法第399条第1項の同意を行っております。

(4) 【役員の報酬等】

提出会社の役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針

取締役及び監査役の報酬については、2007年2月27日開催の第57回定時株主総会の決議により、以下のとおり取締役全員及び監査役全員の報酬総額の最高限度額を決定しております。

取締役の報酬額 年額200百万円以内
監査役の報酬額 年額 60百万円以内

当社は、2021年1月18日開催の取締役会において、取締役の個人別の報酬等の内容にかかる決定方針を決議しており、その内容は次のとおりです。

取締役の報酬は、当社の持続的な成長と中長期的な企業価値の向上に向け、当該取締役の意欲を高めることのできる、適切、公正かつバランスの取れたものとするを基本方針としております。

具体的には、代表取締役・取締役別、委嘱された業務執行の役職別（社長、会長、専務執行役員、常務執行役員、執行役員）・キャリア別の体系とし、その基準額は、株主総会で承認された報酬総額の範囲内で、独立社外取締役の意見を踏まえて代表取締役社長が決定しております。

なお、取締役の報酬は、月毎に支給する定額の金銭報酬（固定報酬）のみであります。

上記記載の公正性・透明性を確保するための手続きを経て、株主総会の決議によって定められた報酬総額の範囲内で決定されていることから、取締役会は、当事業年度に係る取締役の個人別の報酬等の内容がこの報酬等の決定方針に沿うものであると判断いたしました。

また、各監査役の報酬は、株主総会で承認された報酬総額の範囲内で、監査役の協議により決定いたします。

提出会社の役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額 (百万円)		対象となる 役員の員数 (名)
		固定報酬		
取締役 (社外取締役を除く)	112	112		5
監査役 (社外監査役を除く)	25	25		3
社外役員	25	25		6

役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準と考え方

当社は、株式の価値の変動または株式にかかる配当によって利益を受けることを目的として保有する株式を純投資目的の株式、それらの目的に加えて、現在に至る取引状況や当社の持続的、中長期的な企業価値の向上に資すると判断し保有する株式を純投資目的以外の株式すなわち政策保有株式と区分しております。なお、当社は純投資目的の株式は保有しておりません。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

イ．保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社は、政策保有株式の保有については、取締役会において、保有目的が適切であり、保有に伴う便益やリスクが資本コストに見合っているかどうかを精査し、保有の適否を検証しています。保有の意義の薄れた株式については、取引先との対話、市場への影響、有効な資金活用の有無等を総合的に考慮した上で、保有の縮減等の検討を行っております。

当社では、2023年1月開催の取締役会において、すべての政策保有株式17銘柄(うち、1銘柄は外国上場)について、2022年度の個別取引をもとに検証を実施いたしました。

その結果、10銘柄については、当社の事業推進への寄与を通じて企業価値の向上に資するものと判断いたしました。また7銘柄については、強化分野への対応や各種情報・機能の提供など経営戦略面での協力関係を通じて、主に当社の持続的成長に資するものと判断し、いずれも保有に合理性が認められることから、すべての株式を継続保有する方針といたしました。

ロ．銘柄数及び貸借対照表上計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	10	19
非上場株式以外の株式	17	9,492

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	-	-	-
非上場株式以外の株式	-	-	-

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
非上場株式	-	-
非上場株式以外の株式	-	-

八．特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報
特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数（株）	株式数（株）		
	貸借対照表計上額 （百万円）	貸借対照表計上額 （百万円）		
野村マイクロ・サイ エンス(株)	1,100,000	1,100,000	環境規制に関する情報収集や環境対策技 術の協力・支援などの面での協力関係を 維持するため	有
	5,176	5,330		
日産化学(株)	192,000	192,000	農薬事業における業務（購買や販売）面 での協力関係を維持するため	有
	1,294	1,256		
小野薬品工業(株)	150,000	150,000	ファインケミカル事業の強化分野におけ る協力関係を維持するため	有
	527	376		
(株)東邦アグロ	592,391	592,391	韓国における唯一の代理店として継続 的・安定的な関係を維持するため	無
	402	385		
O A T アグリオ(株)	201,200	100,600	農薬事業における業務（購買や生産）面 や研究開発面での協力関係を維持するた め	有
	357	213		
日本新薬(株)	36,000	36,000	ファインケミカル事業の強化分野におけ る協力関係を維持するため	有
	291	302		
日本曹達(株)	65,920	65,920	農薬事業とファインケミカル事業におけ る業務（購買や販売）面や研究開発面 での協力関係を維持するため	有
	282	212		
野村ホールディング ス(株)	457,171	457,171	資本政策や株主政策、コーポレートガバ ナンス情報の収集など財務・経営戦略面 での協力関係を維持するため	有
	229	218		
住友化学(株)	426,124	426,124	農薬事業とファインケミカル事業におけ る業務（購買や販売）面や研究開発面 での協力関係を維持するため	有
	212	223		
信越化学工業(株)	11,500	11,500	ファインケミカル事業における多分野 での業務（生産や販売）面や研究開発 面での協力・協業関係を維持するため	無
	202	219		
(株)りそなホールディ ングス	180,000	180,000	傘下金融機関との資金取引、傘下関連企 業との各種取引、事業推進に資する情報 の収集など財務・経営戦略面での協力関 係を維持するため	有
	119	75		
(株)ひろぎんホール ディングス	181,195	181,195	安定的な資金取引のほか、地域経済情報 の収集など財務・経営戦略面での協力関 係を維持するため	無
	115	113		
日本化薬(株)	69,877	69,877	農薬事業とファインケミカル事業におけ る業務（購買や販売）面での協力関係を 維持するため	有
	87	78		
三井化学(株)	20,000	20,000	農薬事業における業務（購買や販売）面 や研究開発面での協力関係を維持するた め	無
	62	61		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
長瀬産業(株)	30,385	30,385	ファインケミカル事業の業務(販売)面 での協力関係を維持するため	有
	61	51		
(株)三井住友フィナン シャル グループ	8,520	8,520	傘下金融機関との資金取引のほか、中国 をはじめとした海外の政治経済情報の収 集など財務・経営戦略面での協力関係を 維持するため	無
	40	32		
(株)クレハ	3,600	3,600	主に農薬事業における業務(購買や生 産)面や研究開発面での協力関係を維持 するため	有
	35	28		

- (注) 1 貸借対照表計上額が資本金額の100分の1を超えている17銘柄について記載しております。
2 定量的な保有効果は記載が困難であるため、記載しておりません。なお、保有の適否に関
する検証は「保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関
する取締役会等における検証の内容」に記載しております。

みなし保有株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
野村ホールディング ス(株)	150,000	150,000	議決権行使の指図権限	有
	75	72		
信越化学工業(株)	20,000	20,000	議決権行使の指図権限	無
	351	380		

- (注) 1 貸借対照表計上額の上位銘柄を選択する段階で、特定投資株式とみなし保有株式を合算し
ておりません。
2 みなし保有株式は、退職給付信託に設定しているものであり、貸借対照表には計上して
おりません。なお、「貸借対照表計上額(百万円)」欄には、事業年度末日における時価に
議決権行使権限の対象となる株式数を乗じて得た額を、また「保有目的」欄には当該株式
について当社が有する権限の内容を記載しております。

- 二. 保有目的が純投資目的である投資株式
該当事項はありません。

第5【経理の状況】

1．連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1976年大蔵省令第28号)に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1963年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2021年12月1日から2022年11月30日まで)の連結財務諸表および事業年度(2021年12月1日から2022年11月30日まで)の財務諸表について、太陽有限責任監査法人により監査を受けております。

3．連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、又は会計基準等の変更等についての的確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、セミナー等へ参加しております。

1【連結財務諸表等】

(1)【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2021年11月30日)	当連結会計年度 (2022年11月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	4,321	4,814
受取手形及び売掛金	11,321	-
受取手形、売掛金及び契約資産	-	3 11,318
商品及び製品	10,830	11,908
仕掛品	544	392
原材料及び貯蔵品	4,997	5,281
返品資産	-	12
その他	516	934
流動資産合計	32,529	34,659
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物(純額)	1 4,299	1 5,516
機械装置及び運搬具(純額)	1 2,417	1 4,597
土地	966	962
建設仮勘定	1,179	345
その他(純額)	1 295	1 313
有形固定資産合計	9,155	11,733
無形固定資産		
	705	615
投資その他の資産		
投資有価証券	2 9,378	2 9,790
長期貸付金	11	14
繰延税金資産	20	74
返品資産	-	45
その他	211	656
貸倒引当金	20	20
投資その他の資産合計	9,598	10,559
固定資産合計	19,458	22,907
資産合計	51,987	57,566

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2021年11月30日)	当連結会計年度 (2022年11月30日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	6,376	5,548
短期借入金	225	97
1年内返済予定の長期借入金	-	1,400
未払金	1,399	3,012
未払法人税等	607	988
未払消費税等	22	9
未払費用	3,244	3,303
返品調整引当金	158	-
返金負債	-	141
その他	57	53
流動負債合計	12,088	14,552
固定負債		
長期借入金	1,400	-
退職給付に係る負債	2,314	2,595
繰延税金負債	1,380	1,510
返品調整引当金(長期)	501	-
返金負債	-	546
その他	84	123
固定負債合計	5,679	4,774
負債合計	17,767	19,325
純資産の部		
株主資本		
資本金	3,214	3,214
資本剰余金	2,608	2,608
利益剰余金	23,308	26,977
自己株式	1,311	1,311
株主資本合計	27,819	31,488
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	5,671	5,955
為替換算調整勘定	267	401
退職給付に係る調整累計額	462	397
その他の包括利益累計額合計	6,400	6,752
純資産合計	34,220	38,240
負債純資産合計	51,987	57,566

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)	当連結会計年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)
売上高	40,287	44,864
売上原価	5 29,784	5 32,853
売上総利益	10,503	12,011
返品調整引当金戻入額	493	-
返品調整引当金繰入額	659	-
差引売上総利益	10,338	12,011
販売費及び一般管理費	1, 2 7,473	1, 2 7,284
営業利益	2,865	4,727
営業外収益		
受取利息	6	3
受取配当金	185	225
受取手数料	467	471
為替差益	178	407
その他	205	135
営業外収益合計	1,041	1,242
営業外費用		
支払利息	31	42
訴訟関連費用	23	0
その他	9	23
営業外費用合計	63	64
経常利益	3,843	5,905
特別利益		
受取補償金	171	-
固定資産売却益	3 1	3 16
特別利益合計	172	16
特別損失		
固定資産除却損	4 65	4 102
減損損失	0	20
その他	11	7
特別損失合計	77	129
税金等調整前当期純利益	3,939	5,792
法人税、住民税及び事業税	954	1,602
法人税等調整額	58	24
法人税等合計	1,012	1,578
当期純利益	2,927	4,214
親会社株主に帰属する当期純利益	2,927	4,214

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)	当連結会計年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)
当期純利益	2,927	4,214
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	1,256	284
為替換算調整勘定	166	133
退職給付に係る調整額	4	65
その他の包括利益合計	1,419	352
包括利益	4,345	4,566
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	4,345	4,566

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2020年12月 1日 至 2021年11月30日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	3,214	2,608	20,869	1,310	25,381
当期変動額					
剰余金の配当			487		487
親会社株主に帰属する当期純利益			2,927		2,927
自己株式の取得				1	1
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					-
当期変動額合計	-	-	2,439	1	2,439
当期末残高	3,214	2,608	23,308	1,311	27,819

	その他の包括利益累計額				純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算調整勘 定	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利 益累計額合計	
当期首残高	4,415	101	466	4,982	30,363
当期変動額					
剰余金の配当				-	487
親会社株主に帰属する当期純利益				-	2,927
自己株式の取得				-	1
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	1,256	166	4	1,419	1,419
当期変動額合計	1,256	166	4	1,419	3,857
当期末残高	5,671	267	462	6,400	34,220

当連結会計年度（自 2021年12月1日 至 2022年11月30日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	3,214	2,608	23,308	1,311	27,819
会計方針の変更による累積的影響額			3		3
会計方針の変更を反映した当期首残高	3,214	2,608	23,305	1,311	27,816
当期変動額					
剰余金の配当			542		542
親会社株主に帰属する当期純利益			4,214		4,214
自己株式の取得				0	0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					-
当期変動額合計	-	-	3,672	0	3,672
当期末残高	3,214	2,608	26,977	1,311	31,488

	その他の包括利益累計額				純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算調整勘 定	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利 益累計額合計	
当期首残高	5,671	267	462	6,400	34,220
会計方針の変更による累積的影響額				-	3
会計方針の変更を反映した当期首残高	5,671	267	462	6,400	34,217
当期変動額					
剰余金の配当				-	542
親会社株主に帰属する当期純利益				-	4,214
自己株式の取得				-	0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	284	133	65	352	352
当期変動額合計	284	133	65	352	4,024
当期末残高	5,955	401	397	6,752	38,240

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)	当連結会計年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	3,939	5,792
減価償却費	1,351	1,374
のれん償却額	39	39
退職給付に係る負債の増減額(は減少)	317	246
返品調整引当金の増減額(は減少)	165	659
返品資産の増減額(は減少)	-	56
返金負債の増減額(は減少)	-	688
受取利息及び受取配当金	191	228
支払利息	31	42
固定資産除却損	65	102
固定資産売却損益(は益)	1	15
売上債権の増減額(は増加)	8	57
棚卸資産の増減額(は増加)	1,086	1,166
仕入債務の増減額(は減少)	700	856
未払金の増減額(は減少)	595	535
未払費用の増減額(は減少)	170	59
未払消費税等の増減額(は減少)	521	197
その他	66	282
小計	3,481	4,980
利息及び配当金の受取額	191	228
利息の支払額	31	44
法人税等の支払額	702	1,295
法人税等の還付額	0	0
営業活動によるキャッシュ・フロー	2,940	3,869
投資活動によるキャッシュ・フロー		
投資有価証券の売却による収入	6	-
有形固定資産の取得による支出	1,689	2,724
有形固定資産の売却による収入	262	29
無形固定資産の取得による支出	254	33
その他	14	80
投資活動によるキャッシュ・フロー	1,689	2,809
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額(は減少)	227	149
長期借入れによる収入	200	-
長期借入金の返済による支出	450	-
自己株式の取得による支出	1	0
配当金の支払額	487	542
財務活動によるキャッシュ・フロー	965	691
現金及び現金同等物に係る換算差額	78	125
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	364	493
現金及び現金同等物の期首残高	3,956	4,321
現金及び現金同等物の期末残高	4,321	4,814

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 5社

連結子会社名は、「第1 企業の概況 4. 関係会社の状況」に記載のとおりであります。

(2) 非連結子会社の名称

HOKKO CHEMICAL AMERICA CORPORATION

連結の範囲から除いた理由

非連結子会社は、小規模であり、純資産、売上高、当期純損益(持分に見合う額)および利益剰余金(持分に見合う額)等は、連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないため、連結の範囲から除いています。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の非連結子会社はありません。

(2) 持分法を適用しない非連結子会社の名称等

HOKKO CHEMICAL AMERICA CORPORATION

持分法を適用しない理由

持分法を適用していない非連結子会社は、当期純損益(持分に見合う額)および利益剰余金(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ、全体としても重要性がないため、持分法の適用範囲から除外しています。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうち張家港北興化工有限公司の決算日は12月31日であります。

連結財務諸表の作成にあたっては、連結決算日現在で実施した仮決算に基づく財務諸表を使用しております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準および評価方法

有価証券

その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

決算末日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定。)によっております。

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法によっております。

デリバティブ

時価法によっております。

棚卸資産

主として総平均法による原価法(収益性の低下による簿価切下げの方法)によっております。

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産(リース資産を除く)

当社および国内連結子会社は定率法、但し、建物(建物附属設備を除く)は1998年4月1日以後取得分より建物附属設備および構築物は2016年4月1日以後取得分より定額法を採用しております。また、在外連結子会社は定額法によっております。

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物及び構築物 7～47年

機械装置及び運搬具 4～15年

無形固定資産(リース資産を除く)

定額法によっております。但し、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法によっております。

リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒損失に備えるため、当社および国内連結子会社は一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(4) 重要な収益及び費用の計上基準

当社グループは主に農薬事業製品、ファインケミカル事業製品及び繊維資材事業製品の製造および販売を行っており、顧客との契約に基づいて製商品を引渡す履行義務を負っております。製商品の販売に係る収益は、顧客が当該製商品に対する支配を獲得する製商品の引渡時点において履行義務が充足されると判断しており、引渡時点で収益を認識しておりますが、国内の販売においては、出荷時から当該製商品の支配が顧客に移転される時までの期間が通常の期間であることから、出荷時に収益を認識しております。また、輸出取引については、主にインコタームズ等で定められた貿易条件に基づきリスク負担が顧客に移転したと見込まれる時点で収益を認識しております。

各事業の収益は、顧客に支払われる販売促進費等の対価を控除した金額で算定しております。また、買戻し契約に該当する有償支給取引について、加工代相当額のみを純額で収益として認識しております。

なお、農薬事業の収益において顧客との契約により一定の返品が見込まれる製商品の販売について、返品されると見込まれる製商品の額を見積り、当該見積り額を収益より控除した金額で算定し、重大な戻入れが生じない可能性が高い範囲でのみ収益を認識しております。

(5) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

数理計算上の差異および過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生の日翌連結会計年度から費用処理しております。

(6) 重要なヘッジ会計の方法

ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理によっております。また、金利スワップ取引については、すべて特例処理の要件を満たしているため、特例処理によっております。

ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段.....外貨建金銭債権および金利スワップ取引

ヘッジ対象.....外貨建予定取引および長期借入金

ヘッジ方針

同一通貨の外貨建金銭債権を外貨建金銭債務の支払に充当し、この充当部分をヘッジ手段としております。また、変動金利の借入債務を固定金利に変換することによって金利上昇リスクを回避し、調達コストとキャッシュ・フローを固定化するため、金利スワップ取引を行っております。

ヘッジ有効性評価の方法

外貨建金銭債権をヘッジ手段、外貨建予定取引をヘッジ対象とする個別ヘッジについては、金額・期間等の重要な条件が同一であることをもって、ヘッジの有効性を評価しております。また、金利スワップ取引については、金利スワップの特例処理の要件を満たしているため、ヘッジの有効性の評価を省略しております。

(7) のれんの償却方法および償却期間

のれんの償却については、10年の均等償却を行っております。

(8) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金および容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資を資金の範囲としております。

(9) 重要な外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。なお、在外子会社の資産及び負債は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は、期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定に含めております。

(重要な会計上の見積り)

1. 返金負債及び返品資産

(1) 当連結会計年度の連結財務諸表に計上した額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2021年11月30日)	当連結会計年度 (2022年11月30日)
返品調整引当金	158	-
返品調整引当金(長期)	501	-
返金負債	-	141
返金負債(長期)	-	546
返品資産	-	12
返品資産(長期)	-	45

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

当社グループの農薬事業における農薬製商品には主に3年から5年の有効期限が定められており、顧客との契約によって、有効期限が経過した農薬製商品については当初販売価額から一定の料率を差し引いた価額により返品を受け入れております。

当社グループは、将来の返品発生予想に基づく返品発生見込額を収益より控除するとともに、返金負債として計上しております。また、返品された農薬製商品のうち、品質に問題がない製品は新規製造過程でも利用していますが、一部は廃棄しているため、返品された製商品のうち再利用できる製商品の発生額を見積り、当該発生額を返品資産として計上しております。

なお、当連結会計年度における返金負債残高は688百万円、返品資産残高は56百万円であり、連結総資産に対する割合はそれぞれ返金負債が1.2%、返品資産が0.1%であります。

当社グループの返金負債の計上に際しては、農薬製商品グループ毎に予想返品率を算定し、有効期限未到来の製商品出荷実績に乗じることによって将来の返品発生額を見積もっております。各農薬製商品グループの予想返品率は、農薬製商品の製造年度毎の返品実績と製商品出荷実績に基づき算定しておりますが、近年、農薬製商品の有効期限は各種技術向上により伸長する傾向があり、当該有効期限の伸長による変化に係る補正を予想返品率の算定に反映しております。また、返品資産は、返品負債に原価率と予想廃棄率を考慮することで見積っております。予想廃棄率は当該返品農薬製商品の廃棄に係る過去実績に基づき算定しております。

なお、予想返品率や予想廃棄率の見積りは過去と同水準で発生するとの仮定に基づいておりますが、農業政策、市場動向や天候・病害虫の発生といった事業環境の変化によって影響を受ける可能性があり、翌連結会計年度以降の連結財務諸表に重要な影響を与える場合があります。

2. 棚卸資産の評価

(1) 当連結会計年度の連結財務諸表に計上した額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2021年11月30日)	当連結会計年度 (2022年11月30日)
商品及び製品	10,830	11,908
仕掛品	544	382
原材料及び貯蔵品	4,997	5,281

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

棚卸資産は総平均法による原価法(収益性の低下による簿価切下げの方法)により評価しております。棚卸資産の正味売却価額が帳簿価額を下回った場合は、帳簿価額を正味売却価額まで減額し、当該減少額を棚卸資産評価損として売上原価に計上しております。また、回転期間が長期化した棚卸資産については、個別に売却可能性を検討した上で、直近の使用実績に照らして帳簿価額を切り下げ、当該切り下げ額を棚卸資産評価損として売上原価に計上しております。

当連結会計年度における棚卸資産評価損の金額は375百万円であり、連結総資産に対する割合は0.7%であります。

なお、当該見積りには、将来の不確実な市場環境の変動等によって影響を受ける可能性があり、翌連結会計年度以降の連結財務諸表に重要な影響を与える場合があります。

(会計方針の変更)

(収益認識に関する会計基準等の適用)

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を当連結会計年度の期首から適用し、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額で収益を認識することといたしました。なお、「収益認識に関する会計基準の適用指針」第98項に定める代替的な取扱いを適用し、商品又は製品の国内販売において、出荷時から当該商品又は製品の支配が顧客に移転される時までの期間が通常の間である場合には、出荷時に収益を認識しております。

収益認識会計基準等の適用による主な変更点は以下のとおりであります。

1. 返品権付きの販売に係る収益認識

農業事業において顧客との契約により一定の返品が見込まれる製商品の販売について、従来、販売時対価の全額を収益として認識し、将来の返品発生予想に基づく損失見込額を返品調整引当金として計上しておりましたが、当該返品されると見込まれる製商品についての売上高および売上原価相当額を認識しない方法に変更しており、「返金負債」を流動負債および固定負債に、「返品資産」を流動資産および固定資産にそれぞれ表示しております。

2. 変動対価に係る収益認識

顧客に支払われる販売促進費等の対価について、従来、その一部を販売費及び一般管理費として計上しておりましたが、売上高から控除する方法に変更しております。

3. 有償支給取引に係る収益認識

買戻し契約に該当する有償支給取引について、従来、有償支給元への売り戻し時に売上高と売上原価を計上しておりましたが、加工代相当額のみを純額で収益として認識する方法に変更しております。

4. 輸出取引に係る収益認識

従来、船積み時に収益を認識しておりましたが、主にインコタームズ等で定められた貿易条件に基づき、リスク負担が顧客に移転したと見込まれる時点で収益を認識する方法に変更しております。

収益認識会計基準等の適用については、収益認識会計基準第84項ただし書きに定める経過的な取扱いに従っており、当連結会計年度の期首より前に新たな会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を、当連結会計年度の期首の利益剰余金に加減し、当該期首残高から新たな会計方針を適用しております。ただし、収益認識会計基準第86項に定める方法を適用し、当連結会計年度の期首より前までに従前の取扱いに従ってほとんどすべての収益の額を認識した契約に、新たな会計方針を適用していません。

この結果、当連結会計年度の売上高は1,101百万円減少し、売上原価は260百万円減少、販売費及び一般管理費は713百万円減少、営業利益、経常利益および税金等調整前当期純利益はそれぞれ128百万円減少しております。また、利益剰余金の当期首残高は3百万円減少しております。

収益認識会計基準等を適用したため、前連結会計年度の連結貸借対照表において「流動資産」に表示していた「受取手形及び売掛金」は、当連結会計年度より「受取手形、売掛金及び契約資産」に含めて表示することとしました。ただし、収益認識会計基準第89-2項に定める経過的な取扱いに従って、前連結会計年度について新たな表示方法により組替えを行っておりません。

なお、収益認識会計基準第89-3項に定める経過的な取扱いに従って、前連結会計年度に係る「収益認識関係」注記については記載していません。

(時価の算定に関する会計基準等の適用)

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 2019年7月4日。以下、「時価算定会計基準」という。)等を当連結会計年度の期首から適用し、時価算定会計基準第19項および「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 2019年7月4日)第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することとしております。なお、これによる当連結会計年度に係る連結財務諸表への影響はありません。

また、「金融商品関係」注記において、金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項等の注記を行うこととしました。ただし、「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第19号 2019年7月4日)第7-4項に定める経過的な取扱いに従って、当該注記のうち前連結会計年度に係るものについては記載していません。

(連結貸借対照表関係)

1 有形固定資産の減価償却累計額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2021年11月30日)	当連結会計年度 (2022年11月30日)
	31,955百万円	32,655百万円

2 非連結子会社および関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2021年11月30日)	当連結会計年度 (2022年11月30日)
投資有価証券(株式)	10百万円	10百万円

3 受取手形、売掛金及び契約資産のうち、顧客との契約から生じた債権の金額は以下のとおりであります。

	当連結会計年度 (2022年11月30日)
受取手形	630百万円
売掛金	10,688百万円
契約資産	- 百万円

(連結損益計算書関係)

1 販売費及び一般管理費のうち、主要な費目および金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)	当連結会計年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)
運賃保管料	1,013百万円	1,190百万円
販売促進費	667	0
給料・賞与	1,969	1,989
退職給付費用	20	62
減価償却費	85	124
研究開発費	1,517	1,489

2 一般管理費に含まれる研究開発費は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)	当連結会計年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)
	1,517百万円	1,489百万円

3 固定資産売却益の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)	当連結会計年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)
機械装置及び運搬具売却益	1百万円	1百万円
土地	-	15
計	1	16

4 固定資産除却損の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)	当連結会計年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)
既存設備撤去費用	17百万円	63百万円
機械装置及び運搬具除却損	43	27
建物及び構築物除却損	2	8
その他	2	4
計	65	102

5 通常の販売目的で保有する棚卸資産の収益性の低下による簿価切下額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)	当連結会計年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)
売上原価	68百万円	11百万円

(連結包括利益計算書関係)

その他の包括利益に係る組替調整額および税効果額

	前連結会計年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)	当連結会計年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	1,802百万円	413百万円
組替調整額	5	-
税効果調整前	1,807	413
税効果額	551	129
その他有価証券評価差額金	1,256	284
為替換算調整勘定		
当期発生額	166	133
退職給付に係る調整額		
当期発生額	188	50
組替調整額	194	144
税効果調整前	6	94
税効果額	2	29
退職給付に係る調整額	4	65
その他の包括利益合計	1,419	352

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)

1. 発行済株式の種類および総数並びに自己株式の種類および株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数(株)	当連結会計年度増加 株式数(株)	当連結会計年度減少 株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	29,985,531	-	-	29,985,531
合計	29,985,531	-	-	29,985,531
自己株式				
普通株式(注)	2,903,353	508	-	2,903,861
合計	2,903,353	508	-	2,903,861

(注) 普通株式の自己株式の増加508株は、単元未満株式の買取による増加であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2021年2月25日 定時株主総会	普通株式	244	9	2020年11月30日	2021年2月26日
2021年7月9日 取締役会	普通株式	244	9	2021年5月31日	2021年8月10日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2022年2月25日 定時株主総会	普通株式	271	利益剰余金	10	2021年11月30日	2022年2月28日

当連結会計年度（自 2021年12月1日 至 2022年11月30日）

1. 発行済株式の種類および総数並びに自己株式の種類および株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数（株）	当連結会計年度増加 株式数（株）	当連結会計年度減少 株式数（株）	当連結会計年度末 株式数（株）
発行済株式				
普通株式	29,985,531	-	-	29,985,531
合計	29,985,531	-	-	29,985,531
自己株式				
普通株式（注）	2,903,861	526	-	2,904,387
合計	2,903,861	526	-	2,904,387

（注） 普通株式の自己株式の増加526株は、単元未満株式の買取による増加であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 （百万円）	1株当たり配当額 （円）	基準日	効力発生日
2022年2月25日 定時株主総会	普通株式	271	10	2021年11月30日	2022年2月28日
2022年7月8日 取締役会	普通株式	271	10	2022年5月31日	2022年8月10日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 （百万円）	配当の原資	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
2023年2月22日 定時株主総会	普通株式	298	利益剰余金	11	2022年11月30日	2023年2月24日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目との関係は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)	当連結会計年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)
現金及び預金勘定	4,321百万円	4,814百万円
預入期間が3ヶ月を超える定期預金	-	-
現金及び現金同等物	4,321	4,814

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金調達方法については主に銀行からの借入による方針です。また、一時的な余資が発生した場合には、短期的な預金等に限定し、運用する方針です。デリバティブは、後述するリスクを回避するために利用しており、投機的な取引は行っておりません。

(2) 金融商品の内容およびそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。当該リスクに関しては、当社グループの与信管理に関する定めに従い、取引先ごとの期日管理および残高管理を行うとともに、主な取引先の信用状況を定期的に把握する体制としております。また、海外顧客との取引から生じている外貨建ての営業債権は、為替の変動リスクに晒されておりますが、同一通貨の外貨建ての営業債務の支払いに充当し、この充当部分をヘッジ手段としております。

投資有価証券はすべて株式であり、主に業務上の関係を有する企業の株式で、市場価格の変動リスクに晒されております。これらについては、定期的に時価を確認しております。

営業債務や借入金は、流動性リスクに晒されておりますが、当社グループでは、各社が月次の資金繰計画を作成する等の方法により管理しております。

営業債務の一部には原料等の輸入に伴う外貨建てのものがあり、為替の変動リスクに晒されておりますが、恒常的に同じ外貨建ての売掛金残高の範囲内にあります。

借入金のうち、短期借入金は主に営業取引に係る資金調達であり、長期借入金は主に設備投資に係る資金調達であります。長期借入金のうちの一部は、変動金利であるため金利の変動リスクに晒されておりますが、支払金利の変動リスクを回避し支払利息の固定化を図るために、金利スワップ取引をヘッジ手段として利用しております。

デリバティブ取引については、借入金に係る支払金利の変動リスクに対するヘッジを目的とした金利スワップ取引であります。

デリバティブ取引の実行・管理につきましては、取引権限等を定めた社内規程に従い、資金担当者が決裁権限者の承認を得て行っております。また、デリバティブ取引の利用にあたっては、信用リスクを軽減するために、信用度の高い国内銀行とのみ取引を行っております。

なお、ヘッジ会計に関するヘッジ手段とヘッジ対象、ヘッジ方針、ヘッジ有効性評価の方法等については、前述の「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項 4. 会計方針に関する事項 (6) 重要なヘッジ会計の方法」をご覧ください。

(3) 金融商品の時価等に関する補足説明

金融商品の時価の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件を採用することにより、当該価額が変動することもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

前連結会計年度（2021年11月30日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 投資有価証券			
其他有価証券	9,348	9,348	-
資産計	9,348	9,348	-
(2) 長期借入金（1年内返済予定を含む）	1,400	1,401	1
負債計	1,400	1,401	1
(3) デリバティブ取引	-	-	-

1 「現金及び預金」、「受取手形、売掛金」、「支払手形及び買掛金」、「短期借入金」、「未払金」、「未払費用」については、短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、記載を省略しております。

2 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額
(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (2021年11月30日)
非上場株式	30

これらについては、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積もることができず、時価を把握することが極めて困難と認められるため、「(1) 投資有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度（2022年11月30日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 投資有価証券			
其他有価証券	9,760	9,760	-
資産計	9,760	9,760	-
(2) 長期借入金（1年内返済予定を含む）	1,400	1,400	0
負債計	1,400	1,400	0
(3) デリバティブ取引	-	-	-

1 「現金及び預金」、「受取手形、売掛金及び契約資産」、「支払手形及び買掛金」、「短期借入金」、「未払金」、「未払費用」については、短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、記載を省略しております。

2 市場価格のない株式等は、「(1) 投資有価証券」には含まれておりません。当該金融商品の連結貸借対照表計上額は以下のとおりです。

(単位：百万円)

区分	当連結会計年度 (2022年11月30日)
非上場株式	30

(注) 1. 金銭債権の連結決算日後の償還予定額
前連結会計年度(2021年11月30日)

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	4,321	-	-	-
受取手形及び売掛金	11,321	-	-	-
合計	15,642	-	-	-

当連結会計年度(2022年11月30日)

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	4,814	-	-	-
受取手形、売掛金及び契約資産	11,318	-	-	-
合計	16,132	-	-	-

(注) 2. 短期借入金および長期借入金の連結決算日後の返済予定額
前連結会計年度(2021年11月30日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	225	-	-	-	-	-
長期借入金	-	1,400	-	-	-	-

当連結会計年度(2022年11月30日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	97	-	-	-	-	-
長期借入金	1,400	-	-	-	-	-

3. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に用いたインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：同一の資産又は負債の活発な市場における(無調整の)相場価格により算定した時価

レベル2の時価：レベル1のインプット以外の直接又は間接的に観察可能なインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：重要な観察できないインプットを用いて算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品
当連結会計年度(2022年11月30日)

区分	時価(百万円)			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券				
その他有価証券				
株式	9,760	-	-	9,760
資産計	9,760	-	-	9,760

(2) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品
当連結会計年度(2022年11月30日)

区分	時価(百万円)			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
長期借入金	-	1,400	-	1,400
負債計	-	1,400	-	1,400

(注) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

投資有価証券

上場株式は相場価格を用いて評価しております。上場株式は活発な市場で取引されているため、その時価をレベル1の時価に分類しております。

長期借入金

長期借入金の時価については、元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっております。変動金利による長期借入金は金利スワップの特例処理の対象とされており、当該金利スワップと一体として処理された元利金の合計額を、同様の借入を行った場合に適用される合理的に見積もられる利率で割り引いて算定する方法によっており、レベル2の時価に分類しております。

(有価証券関係)

1. その他有価証券

	種類	前連結会計年度(2021年11月30日)			当連結会計年度(2022年11月30日)		
		連結貸借 対照表 計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)	連結貸借 対照表 計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上 額が取得原価を超え るもの	(1) 株式	9,110	853	8,257	9,594	945	8,649
	小計	9,110	853	8,257	9,594	945	8,649
連結貸借対照表計上 額が取得原価を超え ないもの	(1) 株式	237	320	82	166	228	61
	小計	237	320	82	166	228	61
合計		9,348	1,173	8,175	9,760	1,173	8,587

2. 連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	6	-	5

当連結会計年度(自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	-	-	-

(デリバティブ取引関係)

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

該当事項はありません。

2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

前連結会計年度(2021年11月30日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(2022年11月30日)

該当事項はありません。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社は確定給付型の制度として、企業年金基金制度および退職一時金制度を設けております。また、国内連結子会社は退職一時金制度および中小企業退職金共済制度を設けております。

なお、当社は退職給付信託を設定しております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)	当連結会計年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)
退職給付債務の期首残高	8,162百万円	8,060百万円
勤務費用	274	297
利息費用	64	64
数理計算上の差異の発生額	16	264
退職給付の支払額	424	541
退職給付債務の期末残高	8,060	7,617

(注) 簡便法を採用している連結子会社の退職給付費用は、勤務費用に計上しております。

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)	当連結会計年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)
年金資産の期首残高	5,537百万円	5,747百万円
期待運用収益	102	105
数理計算上の差異の発生額	171	214
事業主からの拠出額	218	145
退職給付の支払額	281	327
年金資産の期末残高	5,747	5,456

(3) 退職給付債務および年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債および退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2021年11月30日)	当連結会計年度 (2022年11月30日)
積立型制度の退職給付債務	5,238百万円	5,022百万円
年金資産	5,747	5,456
	509	433
非積立型制度の退職給付債務	2,823	2,595
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	2,314	2,162
退職給付に係る負債	2,314	2,595
退職給付に係る資産	-	433
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	2,314	2,162

(4) 退職給付費用およびその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)	当連結会計年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)
勤務費用	274百万円	297百万円
利息費用	64	64
期待運用収益	102	105
数理計算上の差異の費用処理額	55	98
過去勤務費用の費用処理額	139	46
確定給付制度に係る退職給付費用	43	112

(注) 簡便法を採用している連結子会社の退職給付費用は、勤務費用に計上しております。

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりです。

	前連結会計年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)	当連結会計年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)
過去勤務費用	139百万円	46百万円
数理計算上の差異	133	48
合計	6	94

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりです。

	前連結会計年度 (2021年11月30日)	当連結会計年度 (2022年11月30日)
未認識過去勤務費用	46百万円	- 百万円
未認識数理計算上の差異	619	572
合計	665	572

(7) 年金資産に関する事項

年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2021年11月30日)	当連結会計年度 (2022年11月30日)
債券	69.5%	69.1%
株式	26.6	28.4
その他	3.8	2.5
合計	100.0	100.0

(注) 年金資産合計には、企業年金制度に対して設定した退職給付信託が前連結会計年度8.5%、当連結会計年度8.7%含まれております。

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在および予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在および将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

	前連結会計年度 (2021年11月30日)	当連結会計年度 (2022年11月30日)
割引率	0.8%	0.8%
長期期待運用収益率	2.0%	2.0%
予想昇給率	2.3%	2.3%

3. 確定拠出制度

連結子会社の中小企業退職金共済制度への要拠出額は、前連結会計年度（自 2020年12月1日 至 2021年11月30日）12百万円、当連結会計年度（自 2021年12月1日 至 2022年11月30日）9百万円であります。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産および負債の発生原因別の主な内訳

	前連結会計年度 (2021年11月30日)	当連結会計年度 (2022年11月30日)
繰延税金資産		
退職給付に係る負債	779百万円	737百万円
税務上の繰越欠損金(注) 1	180	138
委託研究費損金不算入額	30	41
棚卸資産評価損	110	116
返品調整引当金	202	-
返金負債	-	211
その他	295	372
繰延税金資産小計	1,596	1,614
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額(注) 1	171	138
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	179	179
評価性引当額小計	350	316
繰延税金資産合計	1,246	1,297
繰延税金負債		
固定資産圧縮積立金	50	47
その他有価証券評価差額金	2,511	2,640
その他	47	47
繰延税金負債合計	2,607	2,733
繰延税金資産の純額(注) 2	-	-
繰延税金負債の純額(注) 2	1,361	1,436

(注) 1 税務上の繰越欠損金及び繰延税金資産の繰越期限別の金額

前連結会計年度(2021年11月30日)

(単位：百万円)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)	合計 (百万円)
税務上の 繰越欠損金(1)	31	76	10	-	27	36	180
評価性引当額	22	76	10	-	27	36	171
繰延税金資産	9	-	-	-	-	-	(2) 9

当連結会計年度(2022年11月30日)

(単位：百万円)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)	合計 (百万円)
税務上の 繰越欠損金(1)	75	1	-	27	18	18	138
評価性引当額	75	1	-	27	18	18	138
繰延税金資産	-	-	-	-	-	-	-

- 1 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。
- 2 前連結会計年度は、税務上の繰越欠損金180百万円(法定実効税率を乗じた額)について、繰延税金資産9百万円計上しております。当該税務上の繰越欠損金は、将来の課税所得の見込みにより、回収可能と判断した部分について評価性引当額を計上しておりません。

(注) 2 繰延税金資産の純額および繰延税金負債の純額は、連結貸借対照表の以下の項目に含まれております。

	前連結会計年度 (2021年11月30日)	当連結会計年度 (2022年11月30日)
固定資産 - 繰延税金資産	20百万円	74百万円
固定負債 - 繰延税金負債	1,380	1,510

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異原因

	前連結会計年度 (2021年11月30日)	当連結会計年度 (2022年11月30日)
法定実効税率	30.6%	30.6%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.4	0.3
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	0.4	0.5
住民税均等割等	0.7	0.6
試験研究費税額控除	4.0	2.4
繰越欠損金の増減額	0.7	0.3
税効果会計を適用していない海外子会社の税額	0.5	1.8
評価性引当額の増減額	0.1	0.0
その他	0.6	0.8
税効果会計適用後の法人税等の負担率	25.7	27.2

(賃貸等不動産関係)

賃貸等不動産の総額に重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(収益認識関係)

1. 顧客との契約から生じる収益を分解した情報

当連結会計年度(自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)

(単位:百万円)

	報告セグメント				その他 (注)	合計
	農薬事業	ファイン ケミカル 事業	繊維 資材 事業	計		
地域別売上高						
日本	20,989	11,828	1,564	34,380	5	34,385
米国	142	1,227	-	1,369	-	1,369
中南米	1,011	0	-	1,011	-	1,011
アジア	2,394	4,255	6	6,654	-	6,654
欧州	31	1,285	-	1,316	-	1,316
その他	94	24	-	118	-	118
顧客との契約から生じる収益	24,661	18,618	1,570	44,849	5	44,854
その他の収益	-	-	-	-	10	10
外部顧客への売上高	24,661	18,618	1,570	44,849	15	44,864

(注) 「その他」の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、石油製品等の販売等を含んでおります。

2. 収益を理解するための基礎となる情報

収益を理解するための基礎となる情報は「(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)4. 会計方針に関する事項 (4)重要な収益及び費用の計上基準」に記載のとおりであります。

3. 当連結会計年度及び翌連結会計年度以降の収益の金額を理解するための情報

(1) 契約残高等

受取手形、売掛金及び契約資産の期首残高及び期末残高はすべて顧客との契約から生じた債権であります。なお、契約資産についての該当事項はありません。また、契約負債については、残高に重要性が乏しく、重要な変動も発生していないため、記載を省略しております。

(2) 残存履行義務に配分した取引価格

当社グループにおいては、予想契約期間が1年を超える重要な取引はありません。また、顧客との契約から生じる対価の中に、取引価格に含まれていない重要な金額はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、分離された財務情報が入手可能であり、当社の取締役会が、経営資源の配分の決定および業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、製品別に区分した「農薬事業」「ファインケミカル事業」「繊維資材事業」ごとに国内および海外の包括的な戦略を考案し、事業活動を展開しております。

したがって当社グループでは、「農薬事業」「ファインケミカル事業」「繊維資材事業」の3つを報告セグメントとしております。

「農薬事業」は、農薬製品、農薬原体等を製造・販売しております。「ファインケミカル事業」は、樹脂添加剤、医薬品中間体、電子材料原料等を製造・販売しております。「繊維資材事業」は、繊維資材を販売しております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であります。

報告セグメントの利益は営業利益(のれん償却前)ベースの数値であります。

セグメント間の内部収益および振替高は市場実勢価格に基づいています。

なお、会計方針の変更に記載のとおり、当連結会計年度の期首から収益認識会計基準等を適用し、収益認識に関する会計処理方法を変更したため、事業セグメントの利益又は損失の算定方法を同様に變更しております。

当該変更により、従来の方法に比べて、当連結会計年度の「農薬事業」の売上高が675百万円減少しておりますが、セグメント利益に影響はありません。また「ファインケミカル事業」の売上高が426百万円、セグメント利益が128百万円それぞれ減少しております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度(自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)

(単位:百万円)

	報告セグメント				その他 (注1)	合計	調整額 (注2)	連結 財務諸表 計上額 (注3)
	農薬事業	ファイン ケミカル 事業	繊維資材 事業	計				
売上高								
外部顧客への売上高	24,121	14,659	1,489	40,268	19	40,287	-	40,287
セグメント間の内部 売上高又は振替高	-	-	22	22	452	474	474	-
計	24,121	14,659	1,510	40,290	471	40,761	474	40,287
セグメント利益又は損失 ()	214	3,044	38	2,868	14	2,882	18	2,865
セグメント資産	22,415	14,125	890	37,430	512	37,942	14,045	51,987
その他の項目								
減価償却費	443	893	1	1,336	15	1,351	-	1,351
有形固定資産及び無形 固定資産の増加額	1,553	388	23	1,964	-	1,964	4	1,968

(注) 1. 「その他」の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、石油製品の販売等を含んでおりません。

2. セグメント利益又は損失の調整額 18百万円には、セグメント間取引消去21百万円およびのれんの償却額39百万円が含まれております。

セグメント資産の調整額14,045百万円には、各報告セグメントに配分していない全社資産17,229百万円およびセグメント間の債権債務の相殺消去等 3,184百万円が含まれております。

3. セグメント利益又は損失は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

当連結会計年度（自 2021年12月1日 至 2022年11月30日）

（単位：百万円）

	報告セグメント				その他 (注1)	合計	調整額 (注2)	連結 財務諸表 計上額 (注3)
	農業事業	ファイン ケミカル 事業	繊維資材 事業	計				
売上高								
外部顧客への売上高	24,661	18,618	1,570	44,849	15	44,864	-	44,864
セグメント間の内部 売上高又は振替高	-	-	10	10	522	533	533	-
計	24,661	18,618	1,580	44,859	537	45,397	533	44,864
セグメント利益又は損失 ()	70	4,621	40	4,732	13	4,745	18	4,727
セグメント資産	24,600	17,255	1,036	42,891	520	43,410	14,156	57,566
その他の項目								
減価償却費	550	802	7	1,359	15	1,374	-	1,374
有形固定資産及び無形 固定資産の増加額	2,677	1,212	4	3,893	1	3,894	1	3,895

(注) 1. 「その他」の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、石油製品の販売等を含んでおりません。

2. セグメント利益又は損失の調整額 18百万円には、セグメント間取引消去21百万円およびのれんの償却額39百万円が含まれております。

セグメント資産の調整額14,156百万円には、各報告セグメントに配分していない全社資産16,920百万円およびセグメント間の債権債務の相殺消去等 2,764百万円が含まれております。

3. セグメント利益又は損失は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

【関連情報】

前連結会計年度（自 2020年12月1日 至 2021年11月30日）

1．製品およびサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2．地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：百万円)

日本	アジア	その他	合計
33,465	4,638	2,184	40,287

(2) 有形固定資産

(単位：百万円)

日本	中国	合計
8,327	828	9,155

3．主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
全国農業協同組合連合会	17,869	農薬事業
信越化学工業株式会社	5,501	ファインケミカル事業

当連結会計年度（自 2021年12月1日 至 2022年11月30日）

1．製品およびサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2．地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：百万円)

日本	アジア	その他	合計
34,396	6,654	3,814	44,864

(2) 有形固定資産

(単位：百万円)

日本	中国	合計
10,447	1,286	11,733

3．主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
全国農業協同組合連合会	17,388	農薬事業
信越化学工業株式会社	6,457	ファインケミカル事業

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 2020年12月1日 至 2021年11月30日）
金額的重要性が低いため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自 2021年12月1日 至 2022年11月30日）
金額的重要性が低いため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 2020年12月1日 至 2021年11月30日）

	農薬事業	ファインケミカル事業	繊維資材事業	その他	調整額	合計
当期償却額	-	-	39	-	-	39
当期末残高	-	-	285	-	-	285

当連結会計年度（自 2021年12月1日 至 2022年11月30日）

	農薬事業	ファインケミカル事業	繊維資材事業	その他	調整額	合計
当期償却額	-	-	39	-	-	39
当期末残高	-	-	246	-	-	246

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

（関連当事者情報）

1. 関連当事者との取引
記載すべき重要な事項はありません。
2. 親会社又は重要な関連会社に関する注記
該当事項はありません。

（1株当たり情報）

	前連結会計年度 （自 2020年12月1日 至 2021年11月30日）	当連結会計年度 （自 2021年12月1日 至 2022年11月30日）
1株当たり純資産額	1,263円58銭	1,412円06銭
1株当たり当期純利益金額	108円06銭	155円60銭

- （注）1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため、記載しておりません。
2. 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 （自 2020年12月1日 至 2021年11月30日）	当連結会計年度 （自 2021年12月1日 至 2022年11月30日）
親会社株主に帰属する当期純利益（百万円）	2,927	4,214
普通株主に帰属しない金額（百万円）	-	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益（百万円）	2,927	4,214
期中平均株式数（株）	27,081,974	27,081,352

（重要な後発事象）

該当事項はありません。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期末残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	225	97	4.0	-
1年以内に返済予定の長期借入金	-	1,400	0.5	-
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く)	1,400	-	-	-
その他有利子負債	2	2	1.6	-
計	1,627	1,499	-	-

(注) 1. その他有利子負債は、連結子会社北興産業㈱の預り保証金であります。

2. 平均利率については、期末借入金等残高に対する加重平均利率を記載しております。

3. 長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く)の連結決算日後5年間の返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	-	-	-	-

【資産除去債務明細表】

該当事項はありません。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(百万円)	13,377	26,763	37,365	44,864
税金等調整前四半期(当期) 純利益金額(百万円)	1,992	3,802	5,420	5,792
親会社株主に帰属する四半期 (当期)純利益金額 (百万円)	1,385	2,671	3,819	4,214
1株当たり四半期(当期)純 利益金額(円)	51.12	98.63	141.03	155.60

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額 (円)	51.12	47.51	42.40	14.57

2【財務諸表等】

(1)【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2021年11月30日)	当事業年度 (2022年11月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	3,680	3,106
売掛金	2 10,298	2 10,350
商品及び製品	10,228	11,684
仕掛品	482	386
原材料及び貯蔵品	4,732	5,044
前払費用	20	17
未収入金	2 516	2 666
返品資産	-	12
その他	2 32	2 39
流動資産合計	29,987	31,305
固定資産		
有形固定資産		
建物（純額）	3,084	4,186
構築物（純額）	603	739
機械及び装置（純額）	1,879	3,899
車両運搬具（純額）	12	18
工具、器具及び備品（純額）	208	225
土地	961	956
建設仮勘定	1,157	11
有形固定資産合計	7,904	10,034
無形固定資産		
ソフトウェア	49	46
その他	229	179
無形固定資産合計	277	226
投資その他の資産		
投資有価証券	9,189	9,511
関係会社株式	527	527
関係会社出資金	1,230	1,230
長期貸付金	2 907	2 672
返品資産	-	45
その他	208	220
貸倒引当金	20	19
投資その他の資産合計	12,042	12,186
固定資産合計	20,222	22,445
資産合計	50,210	53,750

(単位：百万円)

	前事業年度 (2021年11月30日)	当事業年度 (2022年11月30日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	2 5,979	2 5,408
1年内返済予定の長期借入金	-	1,400
未払金	2 1,331	2 2,585
未払法人税等	542	745
未払消費税等	5	1
未払費用	2 3,217	2 3,264
預り金	2 856	2 974
返品調整引当金	158	-
返金負債	-	141
その他	13	6
流動負債合計	12,101	14,525
固定負債		
長期借入金	1,400	-
退職給付引当金	2,873	2,608
返品調整引当金(長期)	501	-
返金負債	-	546
繰延税金負債	1,178	1,311
その他	19	22
固定負債合計	5,971	4,487
負債合計	18,072	19,011
純資産の部		
株主資本		
資本金	3,214	3,214
資本剰余金		
資本準備金	2,608	2,608
資本剰余金合計	2,608	2,608
利益剰余金		
利益準備金	803	803
その他利益剰余金		
固定資産圧縮積立金	113	106
別途積立金	5,680	5,680
繰越利益剰余金	15,368	17,753
利益剰余金合計	21,964	24,343
自己株式	1,311	1,311
株主資本合計	26,476	28,854
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	5,662	5,885
評価・換算差額等合計	5,662	5,885
純資産合計	32,138	34,739
負債純資産合計	50,210	53,750

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)	当事業年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)
売上高	1 36,893	1 40,485
売上原価	1 27,715	1 30,852
売上総利益	9,178	9,632
販売費及び一般管理費	1, 2 6,941	1, 2 6,632
営業利益	2,237	3,000
営業外収益		
受取利息及び配当金	1 185	1 224
その他	1 845	1 993
営業外収益合計	1,030	1,217
営業外費用		
支払利息	1 30	1 38
その他	31	15
営業外費用合計	61	53
経常利益	3,206	4,163
特別利益		
受取補償金	171	-
固定資産売却益	3 1	3 16
特別利益合計	172	16
特別損失		
固定資産除却損	4 59	4 86
減損損失	0	20
特別損失合計	59	106
税引前当期純利益	3,319	4,073
法人税、住民税及び事業税	827	1,114
法人税等調整額	40	35
法人税等合計	867	1,150
当期純利益	2,452	2,923

【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2020年12月1日 至 2021年11月30日）

（単位：百万円）

	株主資本							
	資本金	資本剰余金		利益準備金	利益剰余金			利益剰余金 合計
		資本準備金	資本剰余金 合計		その他利益剰余金			
				固定資産圧 縮積立金	別途積立金	繰越利益剰 余金		
当期首残高	3,214	2,608	2,608	803	119	5,680	13,397	20,000
当期変動額								
固定資産圧縮積立金の取崩			-		7		7	-
剰余金の配当			-				487	487
当期純利益			-				2,452	2,452
自己株式の取得			-					-
株主資本以外の項目の当期変動 額（純額）			-					-
当期変動額合計	-	-	-	-	7	-	1,971	1,965
当期末残高	3,214	2,608	2,608	803	113	5,680	15,368	21,964

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合 計	その他有価 証券評価差 額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	1,310	24,512	4,428	4,428	28,940
当期変動額					
固定資産圧縮積立金の取崩		-		-	-
剰余金の配当		487		-	487
当期純利益		2,452		-	2,452
自己株式の取得	1	1		-	1
株主資本以外の項目の当期変動 額（純額）		-	1,234	1,234	1,234
当期変動額合計	1	1,964	1,234	1,234	3,198
当期末残高	1,311	26,476	5,662	5,662	32,138

当事業年度（自 2021年12月1日 至 2022年11月30日）

（単位：百万円）

	株主資本							利益剰余金 合計
	資本金	資本剰余金		利益準備金	その他利益剰余金			
		資本準備金	資本剰余金 合計		固定資産圧 縮積立金	別途積立金	繰越利益剰 余金	
当期首残高	3,214	2,608	2,608	803	113	5,680	15,368	21,964
会計方針の変更による累積的影響額							3	3
会計方針の変更を反映した当期首残高	3,214	2,608	2,608	803	113	5,680	15,365	21,961
当期変動額								
固定資産圧縮積立金の取崩			-		6		6	-
剰余金の配当			-				542	542
当期純利益			-				2,923	2,923
自己株式の取得			-					-
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			-					-
当期変動額合計	-	-	-	-	6	-	2,388	2,381
当期末残高	3,214	2,608	2,608	803	106	5,680	17,753	24,343

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	1,311	26,476	5,662	5,662	32,138
会計方針の変更による累積的影響額		3			3
会計方針の変更を反映した当期首残高	1,311	26,473	5,662	5,662	32,135
当期変動額					
固定資産圧縮積立金の取崩		-		-	-
剰余金の配当		542		-	542
当期純利益		2,923		-	2,923
自己株式の取得	0	0		-	0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）		-	223	223	223
当期変動額合計	0	2,381	223	223	2,604
当期末残高	1,311	28,854	5,885	5,885	34,739

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準および評価方法

(1) 子会社株式

移動平均法による原価法によっております。

(2) その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

決算末日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定。）によっております。

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法によっております。

2. デリバティブの評価方法

時価法によっております。

3. 棚卸資産の評価基準および評価方法

総平均法による原価法（収益性の低下による簿価切下げの方法）を採用しております。

4. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産（リース資産を除く）

定率法を採用しております。但し、建物（建物附属設備を除く）は1998年4月1日以後取得分より、建物附属設備および構築物は2016年4月1日以後取得分より定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物及び構築物 7～47年

機械装置及び運搬具 4～15年

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）

定額法によっております。但し、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法によっております。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

5. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務および年金資産の見込額に基づき、計上しております。

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌事業年度から費用処理しております。

6. ヘッジ会計の方法

(1) ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理によっております。また、金利スワップ取引については、すべての特例処理の要件を満たしているため、特例処理によっております。

(2) ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段.....外貨建金銭債権および金利スワップ取引

ヘッジ対象.....外貨建予定取引および長期借入金

(3) ヘッジ方針

同一通貨の外貨建金銭債権を外貨建金銭債務の支払に充当し、この充当部分をヘッジ手段としておりません。また、変動金利の借入債務を固定金利に変換することによって金利上昇リスクを回避し、調達コストとキャッシュ・フローを固定化するため、金利スワップ取引を行っております。

(4) ヘッジ有効性評価の方法

外貨建金銭債権をヘッジ手段、外貨建予定取引をヘッジ対象とする個別ヘッジについては、金額・期間等の重要な条件が同一であることをもって、ヘッジの有効性を評価しております。また、金利スワップ取引については、金利スワップの特例処理の要件を満たしているため、ヘッジの有効性の評価を省略しております。

7. 収益及び費用の計上基準

当社は主に農業事業製品およびファインケミカル事業製品の製造および販売を行っており、顧客との契約に基づいて製商品を引渡す履行義務を負っております。製商品の販売に係る収益は、顧客が当該製商品に対する支配を獲得する製商品の引渡時点において履行義務が充足されると判断しており、引渡時点で収益を認識しておりますが、国内の販売においては、出荷時から当該製商品の支配が顧客に移転される時までの期間が通常の期間であることから、出荷時に収益を認識しております。また、輸取引については、主にインコタームズ等で定められた貿易条件に基づきリスク負担が顧客に移転したと見込まれる時点で収益を認識しております。

各事業の収益は、顧客に支払われる販売促進費等の対価を控除した金額で算定しております。また、買戻し契約に該当する有償支給取引について、加工代相当額のみを純額で収益として認識しております。

なお、農業事業の収益において顧客との契約により一定の返品が見込まれる製商品の販売について、返品されると見込まれる製商品の額を見積り、当該見積り額を収益より控除した金額で算定し、重大な戻入れが生じない可能性が高い範囲でのみ収益を認識しております。

8. 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異および未認識過去勤務費用の未処理額の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理方法と異なっております。

9. 重要な外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

(重要な会計上の見積り)

1. 返金負債及び返品資産

(1) 当事業年度の財務諸表に計上した額

(単位：百万円)

	前事業年度 (2021年11月30日)	当事業年度 (2022年11月30日)
返品調整引当金	158	-
返品調整引当金(長期)	501	-
返金負債	-	141
返金負債(長期)	-	546
返品資産	-	12
返品資産(長期)	-	45

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

当社の農業事業における農業製商品には主に3年から5年の有効期限が定められており、顧客との契約によって、有効期限が経過した農業製商品については当初販売価額から一定の料率を差し引いた価額により返品を受け入れております。

当社は、将来の返品発生予想に基づく返品発生見込額を収益より控除するとともに、返金負債として計上しております。また、返品された農業製商品のうち、品質に問題がない製品は新規製造過程でも利用していますが、一部は廃棄しているため、返品された製商品のうち再利用できる製商品の発生額を見積り、当該発生額を返品資産として計上しております。

なお、当事業年度における返金負債残高は688百万円、返品資産残高は56百万円であり、総資産に対する割合はそれぞれ返金負債が1.3%、返品資産が0.1%であります。

当社の返金負債の計上に際しては、農業製商品グループ毎に予想返品率を算定し、有効期限未到来の製商品出荷実績に乗じることによって将来の返品発生額を見積もっております。各農業製商品グループの予想返品率は、農業製商品の製造年度毎の返品実績と製商品出荷実績に基づき算定しておりますが、近年、農業製商品の有効期限は各種技術向上により伸長する傾向があり、当該有効期限の伸長による変化に係る補正を予想返品率の算定に反映しております。また、返品資産は、返品負債に原価率と予想廃棄率を考慮することで見積っております。予想廃棄率は当該返品農業製商品の廃棄に係る過去実績に基づき算定しております。

なお、予想返品率や予想廃棄率の見積りは過去と同水準で発生するとの仮定に基づいていますが、農業政策、市場動向や天候・病害虫の発生といった事業環境の変化によって影響を受ける可能性があり、翌事業年度以降の財務諸表に重要な影響を与える場合があります。

2. 棚卸資産の評価

(1) 当事業年度の財務諸表に計上した額

(単位：百万円)

	前事業年度 (2021年11月30日)	当事業年度 (2022年11月30日)
商品及び製品	10,288	11,684
仕掛品	482	386
原材料及び貯蔵品	4,732	5,044

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

棚卸資産は総平均法による原価法(収益性の低下による簿価切下げの方法)により評価しております。棚卸資産の正味売却価額が帳簿価額を下回った場合は、帳簿価額を正味売却価額まで減額し、当該減少額を棚卸資産評価損として売上原価に計上しております。また、回転期間が長期化した棚卸資産については、個別に売却可能性を検討した上で、直近の使用実績に照らして帳簿価額を切り下げ、当該切り下げ額を棚卸資産評価損として売上原価に計上しております。

当事業年度における棚卸資産評価損の金額は345百万円であり、総資産に対する割合は0.6%であります。

なお、当該見積りには、将来の不確実な市場環境の変動等によって影響を受ける可能性があり、翌事業年度以降の財務諸表に重要な影響を与える場合があります。

(会計方針の変更)

1. 収益認識に関する会計基準等の適用

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を当事業年度の期首から適用し、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額で収益を認識することといたしました。なお、「収益認識に関する会計基準の適用指針」第98項に定める代替的な取扱いを適用し、商品又は製品の国内販売において、出荷時から当該商品又は製品の支配が顧客に移転される時までの期間が通常の期間である場合には、出荷時に収益を認識しております。

収益認識会計基準等の適用による主な変更点は以下のとおりであります。

(1) 返品権付きの販売に係る収益認識

農業事業において顧客との契約により一定の返品が見込まれる製商品の販売について、従来、販売時に対価の全額を収益として認識し、将来の返品発生予想に基づく損失見込額を返品調整引当金として計上しておりましたが、当該返品されると見込まれる製商品についての売上高および売上原価相当額を認識しない方法に変更しており、「返金負債」を流動負債および固定負債に、「返品資産」を流動資産および固定資産にそれぞれ表示しております。

(2) 変動対価に係る収益認識

顧客に支払われる販売促進費等の対価について、従来、その一部を販売費及び一般管理費として計上しておりましたが、売上高から控除する方法に変更しております。

(3) 有償支給取引に係る収益認識

買戻し契約に該当する有償支給取引について、従来、有償支給元への売り戻し時に売上高と売上原価を計上しておりましたが、加工代相当額のみを純額で収益として認識する方法に変更しております。

(4) 輸出取引に係る収益認識

従来、船積み時に収益を認識しておりましたが、主にインコタームズ等で定められた貿易条件に基づき、リスク負担が顧客に移転したと見込まれる時点で収益を認識する方法に変更しております。

収益認識会計基準等の適用については、収益認識会計基準第84項ただし書きに定める経過的な取扱いに従っており、当事業年度の期首より前に新たな会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を、当事業年度の期首の利益剰余金に加減し、当該期首残高から新たな会計方針を適用しております。ただし、収益認識会計基準第86項に定める方法を適用し、当事業年度の期首より前までに従前の取扱いに従ってほとんどすべての収益の額を認識した契約に、新たな会計方針を適用しておりません。

この結果、当事業年度の売上高は1,101百万円減少し、売上原価は260百万円減少、販売費及び一般管理費は713百万円減少、営業利益、経常利益および税引前当期純利益はそれぞれ128百万円減少しております。また、利益剰余金の当期首残高は3百万円減少しております。ただし、収益認識会計基準第89-2項に定める経過的な取扱いに従って、前事業年度について新たな表示方法により組替えを行っておりません。

なお、収益認識会計基準第89-3項に定める経過的な取扱いに従って、前事業年度に係る「収益認識関係」注記については記載しておりません。

2. 時価の算定に関する会計基準等の適用

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 2019年7月4日。以下、「時価算定会計基準」という。)等を当事業年度の期首から適用し、時価算定会計基準第19項および「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 2019年7月4日)第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することとしております。なお、これによる当事業年度に係る財務諸表への影響はありません。

(貸借対照表関係)

1 保証債務

張家港北興化工有限公司の三菱UFJ銀行(中国)有限公司よりの借入に対して債務保証をしております。

	前事業年度 (2021年11月30日)	当事業年度 (2022年11月30日)
	228百万円	97百万円

2 区分表示されたもの以外で当該関係会社に対する金銭債権または金銭債務の金額は、次のとおりであります。

	前事業年度 (2021年11月30日)	当事業年度 (2022年11月30日)
短期金銭債権	610百万円	374百万円
長期金銭債権	899	665
短期金銭債務	1,068	1,174

(損益計算書関係)

1 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)	当事業年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)
売上高	770百万円	858百万円
仕入高	2,196	4,562
販売費及び一般管理費	78	78
営業取引以外の取引高	45	52

2 販売費及び一般管理費のうち、販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度27%、当事業年度21%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度73%、当事業年度は79%であります。主要な費目および金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)	当事業年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)
給料・賞与	1,759百万円	1,754百万円
販売促進費	666	-
運賃保管料	933	1,079
研究開発費	1,517	1,489
減価償却費	67	98
退職給付費用	17	34

3 固定資産売却益の内訳は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)	当事業年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)
機械装置及び運搬具売却益	1百万円	1百万円
その他	-	15
計	1	16

4 固定資産除却損の内訳は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2020年12月1日 至 2021年11月30日)	当事業年度 (自 2021年12月1日 至 2022年11月30日)
既存設備撤去費用	17百万円	63百万円
機械装置及び運搬具除却損	38	12
建物及び構築物除却損	2	8
その他	1	3
計	59	86

(有価証券関係)

前事業年度(2021年11月30日現在)

子会社株式および子会社出資金(貸借対照表計上額は子会社株式527百万円、子会社出資金1,230百万円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められるため、子会社株式および子会社出資金の時価を記載しておりません。

当事業年度(2022年11月30日現在)

子会社株式および子会社出資金(貸借対照表計上額は子会社株式527百万円、子会社出資金1,230百万円)は、市場価格のない株式等のため、子会社株式および子会社出資金の時価を記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産および負債の発生原因別の主な内訳

	前事業年度 (2021年11月30日)	当事業年度 (2022年11月30日)
繰延税金資産		
退職給付引当金	947百万円	870百万円
委託研究費損金不算入額	30	41
棚卸資産評価損	98	106
返品調整引当金	202	-
返金負債	-	211
その他	167	181
繰延税金資産小計	1,444	1,408
評価性引当額	27	27
繰延税金資産合計	1,417	1,380
繰延税金負債		
固定資産圧縮積立金	50	47
その他有価証券評価差額金	2,499	2,597
その他	47	47
繰延税金負債合計	2,595	2,691
繰延税金資産の純額	-	-
繰延税金負債の純額	1,178	1,311

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異原因

	前事業年度 (2021年11月30日)	当事業年度 (2022年11月30日)
法定実効税率	30.6%	30.6%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.4	0.3
関連会社への寄付金等永久に損金に算入されない項目	0.1	0.1
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	0.5	0.6
住民税均等割等	0.8	0.8
試験研究費税額控除	4.8	3.4
その他	0.6	0.3
税効果会計適用後の法人税等の負担率	26.1	28.2

(収益認識関係)

収益を理解するための基礎となる情報は「(重要な会計方針) 7. 重要な収益及び費用の計上基準」に記載のとおりであります。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	減価償却 累計額 (百万円)
有形固定資産						
建物	3,084	1,359	9 (2)	248	4,186	5,964
構築物	603	224	3 (2)	85	739	3,646
機械及び装置	1,879	2,723	28 (16)	675	3,899	16,336
車両運搬具	12	15	0	9	18	182
工具、器具及び備品	208	142	0	125	225	2,793
土地	961	6	10	-	956	-
建設仮勘定	1,157	3,824	4,970	-	11	-
有形固定資産計	7,904	8,293	5,021 (20)	1,142	10,034	28,921
無形固定資産						
販売権	226	-	-	47	179	400
特許権	-	-	-	-	-	2
電話加入権	2	-	2	-	-	-
ソフトウェア	49	24	0	26	46	755
ソフトウェア仮勘定	-	24	24	-	-	-
無形固定資産計	277	48	27	73	226	1,156

(注) 1. 「当期減少額」欄の()内は内書きで、減損損失の計上額であります。

(注) 2. 当期増加額のうち主なものは、次のとおりであります。

建物 北海道工場 新除草粒剤・倉庫建設工事 1,198百万円
機械及び装置 北海道工場 新除草粒剤・倉庫建設工事 2,010百万円

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	20	1	2	19
返品調整引当金	659	-	659	-

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	12月1日から11月30日まで
定時株主総会	2月中
基準日	11月30日
剰余金の配当の基準日	5月31日 11月30日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り・買増し	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	-
買取手数料	無料
公告掲載方法	当会社の公告方法は電子公告といたします。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告を行うことが出来ない場合は、日本経済新聞に掲載して行います。なお、電子公告は当社のウェブサイトに掲載しており、そのアドレスは次のとおりであります。 公告掲載URL https://www.hokkochem.co.jp/
株主に対する特典	なし

(注) 当社定款の定めにより、当会社の株主(実質株主を含む。)は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができません。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当ておよび募集新株予約権の割当てを受ける権利
- (4) 株主の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡すことを請求する権利

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書およびその添付書類並びに確認書

事業年度（第72期）（自 2020年12月1日 至 2021年11月30日）2022年2月25日関東財務局長に提出。

(2) 内部統制報告書およびその添付書類

事業年度（第72期）（自 2020年12月1日 至 2021年11月30日）2022年2月25日関東財務局長に提出。

(3) 四半期報告書および確認書

第73期第1四半期（自 2021年12月1日 至 2022年2月28日）2022年4月12日関東財務局長に提出。

第73期第2四半期（自 2022年3月1日 至 2022年5月31日）2022年7月11日関東財務局長に提出。

第73期第3四半期（自 2022年6月1日 至 2022年8月31日）2022年10月12日関東財務局長に提出。

(4) 臨時報告書

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）の規定に基づく臨時報告書
2022年2月28日関東財務局長に提出。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2023年2月22日

北興化学工業株式会社

取締役会 御中

太陽有限責任監査法人

東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 田 尻 慶 太 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 丸 田 力 也 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 山 口 昌 良 印

<財務諸表監査>

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている北興化学工業株式会社の2021年12月1日から2022年11月30日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、北興化学工業株式会社及び連結子会社の2022年11月30日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

その他の事項

会社の2021年11月30日をもって終了した前連結会計年度の連結財務諸表は、前任監査人によって監査されている。前任監査人は、当該連結財務諸表に対して2022年2月25日付けで無限定適正意見を表明している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当連結会計年度の連結財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、連結財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

農業事業における返金負債及び返品資産の見積りの合理性	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>【注記事項】(重要な会計上の見積り)に記載のとおり、会社グループは、農業事業において顧客との契約により一定の返品が見込まれる商品及び製品の販売について、返品が見込まれる商品及び製品の対価を返金負債として計上し、返品された商品及び製品のうち再利用できる商品及び製品の発生額を見積り、当該発生額を返品資産として計上している。当連結会計年度末に計上した返金負債は688百万円、返品資産は56百万円である。</p> <p>返金負債は、農業事業における商品及び製品の種類ごとにグルーピングを行い、当該グループごとの出荷実績に予想返品率を乗じた金額を基に見積っている。また、返品資産は、返金負債に原価率と予想廃棄率を考慮することで見積っている。</p> <p>予想返品率や予想廃棄率といった基礎率は、過去と同水準で発生するとの仮定に基づき、過年度の実績を利用して見積っているが、農業政策、市場動向や天候・病虫害の発生といった事業環境の変化により影響を受けることから、一定の不確実性が存在する。</p> <p>以上より、当監査法人は農業事業における返金負債及び返品資産の見積りの合理性が、監査上の主要な検討事項に該当すると判断した。</p>	<p>当監査法人は、農業事業における返金負債及び返品資産の見積りの合理性を検証するに当たり、主として以下の監査手続を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 顧客と締結された主要な販売契約を閲覧し、返品条件を理解した。 農業事業に係る事業環境を理解するため、経営者に質問を実施するとともに、過年度の実績基礎率の趨勢分析を行うことで、見積りの不確実性に与える影響を検討した。 過年度に見積った基礎率について実績と比較し、期末日における各予想基礎率の見積り方法への影響を評価した。 予想返品率の見積り及び原価率の基礎となる、商品及び製品の種類の別の出荷実績データ及び返品実績データ並びに原価実績データについて、基幹システムから出力したデータと照合した。 予想廃棄率の見積りの基礎となる廃棄実績データについて、根拠資料と照合した。 返金負債及び返品資産の計算の正確性を検証するため、再計算を実施した。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の連結財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

連結財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と連結財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうか検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

連結財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・ 連結財務諸表に対する意見を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当連結会計年度の連結財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

< 内部統制監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、北興化学工業株式会社の2022年11月30日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、北興化学工業株式会社が2022年11月30日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

内部統制報告書に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・ 財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。

2. XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2023年2月22日

北興化学工業株式会社

取締役会 御中

太陽有限責任監査法人

東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 田 尻 慶 太 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 丸 田 力 也 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 山 口 昌 良 印

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている北興化学工業株式会社の2021年12月1日から2022年11月30日までの第73期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、北興化学工業株式会社の2022年11月30日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

その他の事項

会社の2021年11月30日をもって終了した前事業年度の財務諸表は、前任監査人によって監査されている。前任監査人は、当該財務諸表に対して2022年2月25日付けで無限定適正意見を表明している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

農薬事業における返金負債及び返品資産の見積りの合理性

連結財務諸表の監査報告書に記載されている監査上の主要な検討事項（農薬事業における返金負債及び返品資産の見積りの合理性）と同一内容であるため、記載を省略している。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記の監査報告書の原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。

2. XBRLデータは監査の対象には含まれていません。